

就学前教育と学校教育の連携・協力の充実をめざして

—保・幼・小の教職員の意識調査とフィールド調査からみた現状と課題—

小学校入学後の子どもたちが、生き生きと学習したり活動したりできるように、就学前教育と学校教育が連携し協力していくことが、今日的な教育課題の一つになっている。本研究では、小学校教育の立場から、子どもたちの就学前の生活を知るため、平成16年7月から9月にかけて保育所・幼稚園合わせて4箇所にてフィールドワークを実施した。また、連携の実際や状況を知るため、保育所・幼稚園・小学校、合計214箇所276名に質問紙調査を実施した。これらの調査結果をもとに、充実した保・幼・小の連携を進めるためのキーワードを提案する。

目 次

はじめに

第1章 今、求められている保・幼・小連携

第1節 保・幼・小連携の必要性

- (1) なぜ保・幼・小連携が必要か…………… 1
- (2) 一元化が求められている現状…………… 4

第2節 何を連携させるのか、 何で連携していけばよいか

- (1) 就学前の子どもたちの現状…………… 5
- (2) 就学前の子どもたちや
保育所・幼稚園を知る…………… 6

第2章 質問紙調査を通して

第1節 連携の実際とその意識の現状

- (1) 所園校としての連携や交流の現状…………… 7
- (2) 保育士や教職員の意識について…………… 11

第2節 連携・交流の現状と その意識との関連について

- (1) 参観経験による意識の違い…………… 16
- (2) 合同会議や交流回数による
意識の違い…………… 17

第3章 フィールド調査を通して

第1節 保育所の1日

- (1) 聚楽保育所の1日…………… 20
- (2) 壬生保育所の1日…………… 22

第2節 保育所と幼稚園の1週間

- (1) 改進黨保育所の1週間…………… 23
- (2) 竹田幼稚園の1週間…………… 25

第4章 子どもたちの豊かな育ちを 支えるために

第1節 就学前と学校を比べて

- (1) 就学前の1日と学校の1日…………… 28
- (2) 就学前の1週間と学校の1週間…………… 30

第2節 これから進める連携の充実にむけて

- (1) 育てたい力の共通理解と
深い子ども理解…………… 31
- (2) まずは、お互いに出かけて
体験しよう…………… 31

おわりに…………… 32

付 表

<研究担当> 藤井 万希子 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究指導> 外川 正明 (京都市総合教育センター研究課指導主事)

<調査協力> 京都市立市営保育所20所

京都市立幼稚園16園

京都市立小学校178校

<研究協力> 京都市保健福祉局福祉部保育課・京都市こどもみらい館

はじめに

小学校入学は、子どもにとっても保護者にとっても大きな節目の時であり、入学式は緊張の時である。入学式では子どもたちのドキドキわくわくの気持ちが手にとるようにわかる。迎える教師にとっても緊張の時である。胸の鼓動が聞こえるかと思う子、嬉しくて嬉しくて体中でその気持ちを表現している子、不安な表情で座っている子、心配そうに子どもを見つめておられる保護者、様々な姿がそこにある。わたしたち教師は、この子どもたち一人ひとりを大切に生き生きと学校生活を送らせたいと強く思う時である。

ところが最近、始まったばかりの1年生の教室で、体が固まってしまう、なかなか教室に入れないう子や、教室や集団の中で孤立したり、自己中心的な態度や行動をしたりする子の姿が目立つようになり、さらには授業が成り立ちにくいといった状況も出てきたと報告されるようになった。いわゆる「小1問題」である。また、子育て不安を訴える保護者や児童虐待などの増加もあり、この入学前後の時期を、子どもたちが、スムーズに学校教育に移行できるように、保育所や幼稚園とどのように連携し接続させるかということが課題となっている。

おりしも平成16年10月30日に幼児教育のあり方を検討している中央教育審議会は、幼稚園と小学校の連携を強化し、幼小一貫教育を進めるよう求める中間報告を提出した。その中では、幼稚園児が違和感なく小学校に入学できるよう一貫したカリキュラムを編成することや、双方の教職員を対象とした合同研修の実施や、幼小連携アドバイザーの配置も提唱している。

こうした中、本研究では、この連携ということ を考察していくために、まず小学校教育の立場から、保育所と幼稚園にフィールドワーク調査に入り、子どもたちの現状や就学前の保育や教育の実 際を学んだ。さらに保育所・幼稚園・小学校の連 携の現状や保育所・幼稚園・小学校の保育士・教 職員の連携に対する意識を知るために質問紙調査 も実施した。

第1章では、なぜ連携が求められているのか。第2章では、質問紙調査を通して、連携の実際とその意識の現状などについて、第3章では、フィールド調査について、第4章では、就学前と学校を比較考察することで、これから進める連携の充実にむけてその糸口となるキーワードを見つけ提案したい。

第1章 今、求められている保・幼・小連携

第1節 保・幼・小連携の必要性

(1) なぜ保・幼・小連携が必要か

小学校学習指導要領では、「小学校間や幼稚園、中学校、一中略一などとの間の連携や交流を図ると共に、交流の機会を設けること」⁽¹⁾と示されている。また、幼稚園教育要領解説では、「幼稚園から小学校への移行を円滑にする必要がある」⁽²⁾と示され、保育所保育指針でも、「小学校との関係については、子どもの連続的な発達などを考慮して、お互いに理解を深めるようにする」⁽³⁾と示されている。

さらには、平成16年中央教育審議会「子どもを取巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方に」⁽⁴⁾についての中間報告でも、「人の一生において、幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期である。この時期に経験しておかなければならないことを十分に行わせることは、将来人間として充実した生活を送る上で不可欠である。我々大人は、幼児期における教育が、その後の人間としての生き方を大きく左右する重要なものであることを認識し、子どもの育ちについて常に関心を払うことが必要である」⁽⁴⁾と示され、今後の幼児教育の充実のための具体的方策として7つの重点施策が挙げられ、その中の2点目に発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実ということで、小学校教育との連携・接続の強化・改善が挙げられている。このように、連携が必要といわれる背景には、近年指摘されているいくつかの問題がある。

まず1990年代の半ば頃から、小学校1年生の学級づくりが難しくなっているとの声が各地の小学校現場から寄せられるようになり、特に1998年NHKが「広がる学級崩壊」という番組を放送したことで、この学級づくりの難しさは「小1問題」と呼ばれるようになった。

その後、2000年3月には、文部省の委属を受けた国立教育研究所「学級経営研究会」が、報告書『学級経営をめぐる問題の現状とその対応—関係者間の連携による魅力ある学級づくり—』を公表した。この報告書は、いわゆる「学級崩壊」を「学級がうまく機能しない状況」と呼び、これを「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任によるこれまでの慣習化した手

法では問題解決ができない状態」と定義した。この報告書でも、特に小学校1年生の「学級が機能しない状況」の事例や学級機能の回復事例が取り上げられ、「小1問題」は、全国的な関心を集めるようになった。(5)

当初、「小1問題」に対する教師の戸惑いは大きく、「子どもが理解できない」「まったく指示が入らない」という声があちらこちらの現場で聞かれた。その戸惑いは、教師の指示を素直に聞き、何事にも意欲的に取り組むという従来の1年生像が、子どもの現実から掛け離れたものとなってしまっていたからだと思われる。

一方マスコミ界では、この問題が起きる要因について、「家庭でのしつけに問題がある」「小学校の教員の指導力が低下した」「保育所や幼稚園での『自由保育』が問題だ」等々、家庭、小学校、幼稚園、保育所に責任を帰する論が飛び交っていた。

しかし、この問題が複合的な要因のもとで起きているとの認識が広まるにつれて、小学校と保育所・幼稚園の連携や家庭支援、地域におけるコミュニティーの再構築など、総合的な取組の中で「小1問題」を正しくとらえ、乗り越えようとする実践が盛んになった。

新保真紀子は、「小1問題」を、「高学年の『学級崩壊』と異なり、幼児期を十分、生ききれてこなかった、幼児期をひきずっている子どもたちが引き起こす問題といえる」(6)ととらえている。確かに「先生ぼくのことを見て」「ぼくだけを見てくれたらいいの」「こんなこと出来たんだよ。早く見てよ」と口々に要求し、トラブルになったり、順番が待てずにパニックになったり、すねたりする。これらはひっきりなしに先生にかまってほしくて仕方がないという現れで、担任に対して反発を感じている高学年とは違い、担任が大好きで親しみを感じスキップを求める幼児的な欲求であると考えられる。

また、このことは、高田一宏が指摘するように、「幼児期から小学校低学年にかけての保育・教育システムが、子どもの育ちの変化に対応できなくなっていることにある」(7)といえるのではないかと。

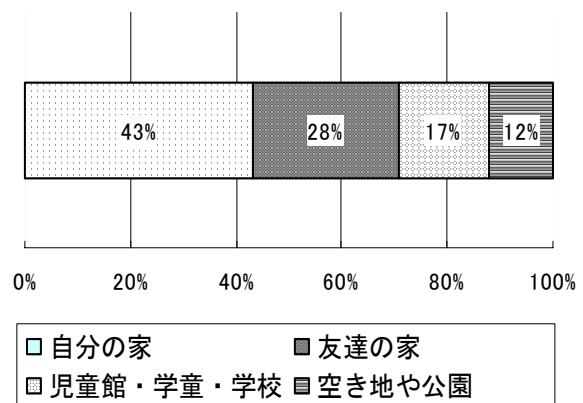
その要因としては、新保は、①子どもたちを取巻く社会の変化、②親の子育ての変化と孤立化、③変わってきた就学前教育と、変わらない学校教育の段差の拡大、④自己完結して連携のない就学前教育と学校教育を挙げている。(8)

こうして見ていくと、連携が必要といわれているのは、まず第1に少子化等の影響で幼児期に集

団で遊ぶ経験が少なくなってきている子どもたちの、遊びの3間(仲間と時間と空間)がなくなっていることが挙げられる。

平成13年度に、本研究課石原峰子によって実施された小学校1年生1022名に対する『せいかつアンケート』においても「学校から帰ってどこで遊ぶことがおおいですか」という設問では、図1-1に示すように自分の家で遊ぶことが多いと答えている子が43%ほどにのぼる。何人もの集団で野外で遊ぶという経験は、京都市においても少なくなっているといえるのではないかと。

図1-1 学校から帰ってどこで遊ぶことが多いか



京都市教育委員会 研究紀要J1-01 報告462 小1調査33
平成13年8月 調査対象小学校1年生1022名

人間関係を学ぶ体験や様々な生活体験・自然体験が不足しがちで、自己の欲求と他者の気持ちを押し量り折り合いをつけていくことや、仲間同士が助け合うという意識が十分に育ち切れていない現状があるように思える。少子化は、人口減という将来の問題だけでなく、現在の子どもの成育環境に大きく影響しているのである。「小1問題」とは、学級崩壊というよりも、集団としてまとまらない状態、集団を意識できない未成熟な状態だといえる。子ども同士で学び合う経験が不足する中で、小学校に入学すると35人近い子どもたちが1つの教室で学習するのである。様々な問題が起こっても当然であり、小学校と保育所・幼稚園が連携し、集団の中で人間関係を学ぶ経験や人の気持ちを押し量る経験を重視し取り組んでいく必要がある。

また、第2としては、核家族が増加し、子育てが孤立化して、母子カプセルといわれる現状が、子どもの育ちに大きく影響していると考えられている。20年~30年前には、親以外に近所に親切的な

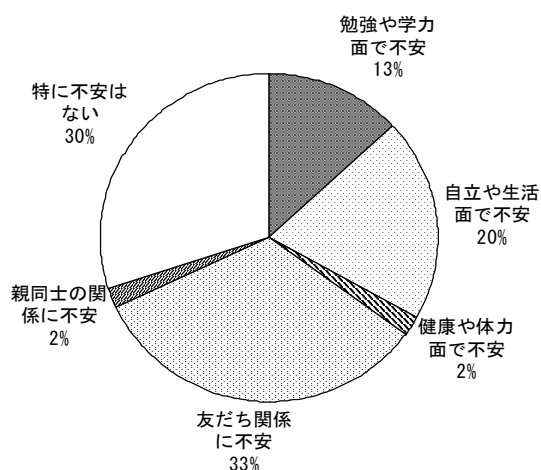
大人や、少し怖い怒ってくれる存在の大人がいた。仕事をしながら子どもたちを見守りはぐくんでくれた何人もの大人たちがいた。

ところが今の子どもたちが会える大人は、親や教師中心にきわめて少なくなっている。新保は、『母子カプセル』といわれる閉塞感の中での孤立した子育て、早期教育花盛りの中で『できる・できない』の一元的価値観にとらわれた子育てのいびつさは、親からも子どもからも自尊感情をうばっている」(9)と述べている。

図1-2 平成15年3月京都市保健福祉局福祉部保育課の行った保護者1628名に対する「保護者の『子育てについてのアンケート』調査報告書からわかるように、「小学校入学への不安」という項目において、「友だち関係に不安がある」が33%もあり、その他自立や生活面での不安など様々な不安を合わせると70%もの保護者が「小学校入学に不安がある」と答えている。(10)

新保がいうように、母親と子どもという閉塞された環境の中で、「できる・できない」といった一元的な価値観にとらわれた子育て環境の中では、不安感をもつ保護者は、これほど多いのである。

図1-2 小学校入学への不安

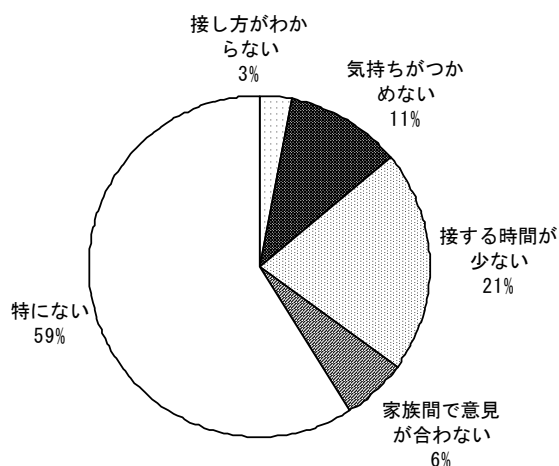


京都市保健福祉局福祉部保育課 保護者の「子育てについてのアンケート」調査報告 調査対象市営保育所の保護者1628名 平成15年3月

このように親に不安があれば、子どもたちも不安になったり、不安定になったりするのもしかたがないことである。

また、図1-3で示す平成14年度本研究課石原による家庭教育調査「子育てに悩みはあるか」においても、41%もの保護者が、「悩みがある」と答えている。(11)

図1-3 「子育ての悩みがあるか」



京都市教育委員会 研究紀要 J1-01 報告 477 家庭教育調査25 平成14年 調査対象 小学校3・5年生 保護者1000名

こうした不安を抱えている保護者に対して、保育所や幼稚園と学校とが連携し、早急に対応していかなければならない。そうすることによって、急増している虐待などにも対応できるのではないかと考える。あるがままの子どもを受けとめ、そこから子どもと共に親も成長していく、その大切さを私たちは保護者に伝え、共に取り組む必要がある。

第3としては、変わってきた就学前教育と変わらなかった学校教育が挙げられる。小学校が実感するより早く子どもたちの異変を指摘していた幼稚園や保育所では、一斉保育や設定保育から個々の主体性を生かした遊びを通した総合的な指導への転換が1989年に幼稚園教育要領で、1990年には厚生省児童家庭局の保育所保育指針で図られた。ところが、この幼児の主体性を重視する「子ども主体の保育」が、教職員の指導性を軽視することかのように誤解され、一斉保育が否定されたようにとらえる向きもあったが、決してそうではなかった。

2000年にはさらに幼稚園要領と保育所保育指針が改訂された。ここでは保育士や教師の役割が強調され、小学校との連携・連続性が明記された。子どもたちの主体性を大切にしながら、子どもたちの遊ぶ意欲を引き出し、自らやってみようとする心を引き出す環境設定、興味づけなどを教職員が仕掛けながら進めている。このような取組は、生活科や総合的な学習の時間などにつながる大切

な取組である。

このように、10年前に大きく変わった就学前教育に対して、小学校が変わってこなかったことが、就学前教育と小学校教育の段差を大きくし、小1問題を引き起こしているのではないか。例えば入学していきなり、チャイムに合わせて一斉に同じ行動をすることは、今の子どもたちに合わなくなってきた。

就学前教育と小学校教育には大きな違いがありながら、それを互いの教職員が、体験し交流し合うこともなく、逆にお互いに不信を募らせていたのではないか。双方がお互いを知り連携していこうとしなければ、とまどう子どもたちを増やすばかりである。

さらに就学前教育といっても、保育所と幼稚園公立と私立と設置者も異なれば、そこで行われている具体的な保育内容・教育内容は多種多様である。それぞれ過ごしてきた数年間の就学前の生活があるのに、小学校に入学したからといって、すぐに一斉に同じように活動に取り組めないのは当然ではないだろうか。

そこで、子どもたちの豊かな育ち・豊かな学びを深めていくための連携を考えるにあたり、就学前教育の流れと内容を理解することから始める。

(2) 一元化が求められている現状

そもそも就学前教育は、どうして幼稚園と保育所に分かれて行なわれてきたのかを改めて確認しておく必要がある。京都市保育園連盟 30 周年記念誌として出された「京都の保育」には、「明治 9 年に創設された東京女子師範学校附属幼稚園が、わが国における本格的な幼稚園（保育施設）の最初のものであるといわれてきた。しかし、それよりも 1 年早い明治 8 年に、京都では、すでに船井郡安栖里村と京都市上京柳池校との、2 ヶ所に保育施設が開設されていた」⁽¹²⁾と記されている。幼稚園の設立経営には公的補助が無かったこともあって多額の費用を要したため、当初の段階での意図を離れて、次第に裕福な階層の子どもたちが早期教育を目的として、就園するものになっていった。その反対に労働者の貧困が社会問題化していった時期でもある 1917 年には、内務省が社会事業の一環として保育所を託児施設として位置づけることによって、補助金を交付してその育成を図ることになった。

京都市における公立の託児所としては、1919 年 12 月に、東三条夜学校内に設置されたのが始まりである。⁽¹³⁾資料を通して、当時の京都市による

設置目的を見ると、保護者の労働を支えることが中心とされている。

こうして保育所は、文部省のもとにある教育施設としての幼稚園とは異なり、福祉施設としての道を歩むことになったのである。

なお、1926 年に幼稚園令が公布され、その中で従来の保育年齢「満 3 年ヨリ」を「3 歳未満ノ幼児ヲ入園セシムルコトヲ得」として幅を拡げ、保育時間も「1 日 5 時間以内」に制限していたのを削除した。また、文部大臣令によって「父母共ニ労働ニ従事シ子女ニ対シテ家庭教育ヲ行フコト困難ナル者」に対する配慮も指示するなど、幼保一元化への可能性も見せたが、文部・内務両省のおもわくの相違などもあって、実を結ぶことはなかった。

戦後の保育所は、まず 1946 年 9 月、生活保護法（旧法）公布とともに、託児事業として保護施設の中に位置づけられ、補助金交付の対象となった。戦前の慈善救済的な児童保護から、すべての児童の心身の健やかな育成をめざす方向へと理念の転換が図られ、保育所にとっては新しい道への出発点となった。しかし幼稚園は、1947 年 3 月に公布された学校教育法のもと教育施設としての別の道を歩むことになり、幼児保育施設は、戦前に続いて二元化の方向をたどることになった。

つまり森田明美がいうように、「幼稚園・保育所の二元化体制の問題については、第二次世界大戦の法制化以前から論議され 1970 年代には研究者や国の審議会でも論議されてきた。しかし、厚生省、文部省と異なる省庁の壁は厚く、むしろ『幼児教育施設』と『児童福祉施設』という役割の違いが強調されてきた」のである。⁽¹⁴⁾

1970 年前後に幼保一元化の世論が高まり、1971 年の中央教育審議会答申が出されても、一元化問題は棚上げされる形となった。

さらに森田は、「こうした強固な二元体制の中で、60 年代から幼稚園、保育所への一元化の取組はなされた。1 つは、自治体レベルの取組である。比較的郡部の小規模自治体において、幼稚園、保育所の一元的運営を工夫してきた試みがあった。もう一つは、同和保育運動の取組である。同和保育運動は入所要件を拡大し、親の就労の有無に関わり無く入所する「皆保育」のシステムを求めた。こうした見方をすると同和保育運動は、保育所と幼稚園の両機能を統一した施設作りであったといえる。しかしながら、このような取組は一般地域の保育所、幼稚園には広がらなかった」⁽¹⁵⁾と述べている。

しかし1990年代になると状況は一変してきた。森田は、「1990年代に入り、にわかに幼稚園・保育所の見直しが行なわれるようになってきた。その背景には、都市化、核家族化、母親の就労の増加等家庭生活が多様化してきているにもかかわらず、保育所、幼稚園ともに地域の多様なニーズに十分に應えるものとはなっていないこと、さらに少子化社会を迎えて、幼稚園等の定員割れや、統廃合が各地で問題になってきたことなどが挙げられる」(16)と指摘している。つまり、保護者が働いている家庭の子どもは保育所で、家庭で保育できる場合は幼稚園へ、という状態が続いてきたが、今日急速に一元化がすすめられている。中山徹や杉山隆は、今行われている幼保一元化を次のように分類している。第1は、幼稚園の一部で保育事業を行う一元化。第2は、同一の敷地に幼稚園と保育所を一体化した施設として整備するタイプ。第3は、子どもの年齢によって保育所と幼稚園をつなげ、就学前の乳児保育と幼児教育の一元化をめざす試み。この場合、保育所と幼稚園は施設としては一体化されず、保育所と幼稚園、小学校の内容的な一貫性を持たせようとする試み。第4は、資格にかかわる一元化である。(17) このように様々な形の一元化の取組が始まっているが、ここには、様々な課題が含まれるものの、大切なことは、このような枠組の論議よりも、就学前の教育として保育内容と教育内容の一元化を図ることだと考える。

第2節 何を連携させるのか 何で連携していけばよいか

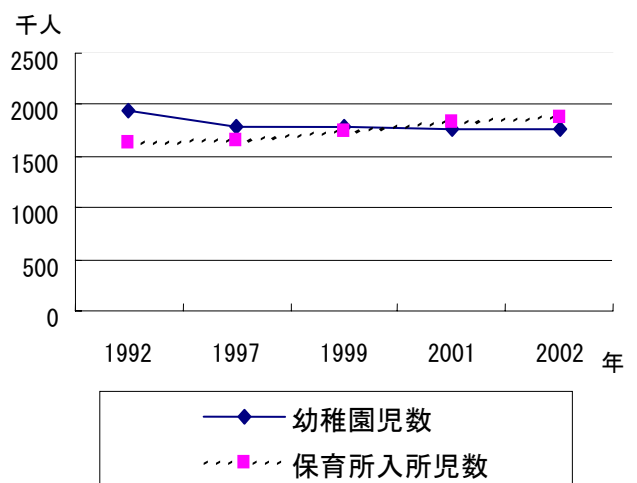
(1) 就学前の子どもたちの現状

現在就学前の子どもたちは、どのような状況に置かれているのだろうか。

現在の日本では、子どもの数が減少しているにもかかわらず、図1-4で示すように、保育所入所児童数は増加しているのである。しかも図1-5で示すように、待機児童数も従来規定のカウントでは39,881人と増加しており、新規定でも25,447人にもものぼり、保育需要は増大している。

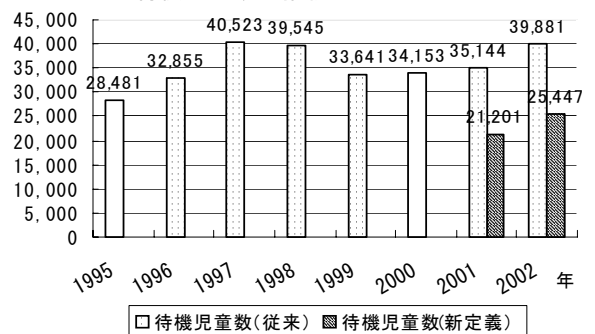
こうした状況に加えて、近年、専業主婦層でも、一時的に幼い子どもを託すことができるといった社会的対応を求める声も、ますます大きくなっているなど、子育て支援を中心とする就学前の保育の充実を求める声も、大きくなっていることが挙げられる。

図1-4 保育所・幼稚園児童数の推移



草土文化『子ども白書 2003』2003. 7p. 142

図1-5 待機児童数の推移



(注1) 各年4月1日現在(厚生労働省保育課調べ)

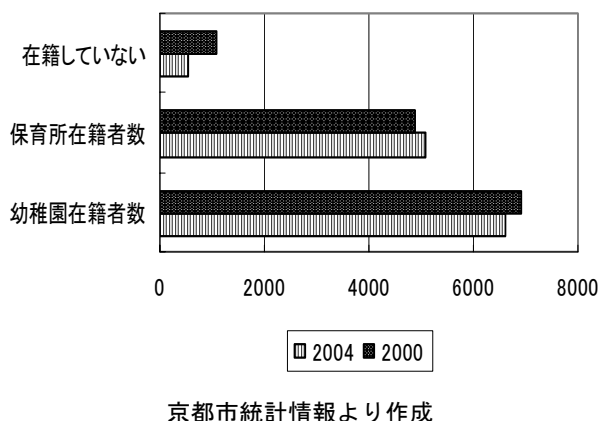
(注2) 2001, 2002年度については保育所入所待機児童の定義の変更をうけて、従来規定のもと、新定義に基づく数値を2つ図示した。なお、新定義は、①ほかに入所可能な保育所があるにもかかわらず、特定の保育所を希望して待機している場合、②認可保育所へ入所希望しても、自治体の単独政策(いわゆる保育室等の認可外施設や保育ママ等)によって対応している場合は、待機児童から除くとしている。

草土文化『子ども白書 2003』2003. 7p. 142

京都市においても、平成16年5月1日現在で、公立・私立合わせて126の幼稚園と28の公立公営保育所を含めた250の保育所が所在している。ここに在籍している5才児は11,710名で5才児全体12,259名の95.5%にあたる。(次ページ図1-6)これにその他の保育施設に在籍している幼児を含めると、今年度の京都市立小学校1年生のほとんどが、小学校入学前に幼児教育や保育をうけたことになる。また2000年と比較すると、子どもの数

は減っているにもかかわらず保育所在籍者は増加している。このように多くの子どもたちが、保育所や幼稚園で保育や教育を受けているのである。

図1-6 京都市の保育所・幼稚園の在籍者数



こうしてみると子どもたちを取り巻く社会情勢や家庭環境が変化し、それにもなつて教育環境や就学前の育ち方も変化して、子どもの育ちは個別的で多様になってきていることが考えられる。そして、その子どもたちが小学校に入学してくるのである。小学校入学と同時に子どもたちが急に変わるわけでもないのに、様々なところから入学してきたたくさんの人数で成る学級集団において、一斉に画一的な学習を進めたならば、そこには当然ながら、大きな段差ができるのではないかと考えられる。子どもたちによっては、これまでと違う生活様式や学習スタイルに適応できず、戸惑いや不安感をもち、登校をしぶったり、自己中心的ともとれる行動や態度をとったりすることも仕方がないことではないだろうか。そのままでは、小学校における基本的な役割とされる「社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度の基礎を身につけ、豊かな人間性を育成する」(18)ことはできない。

子どもたちが、学校生活という新しい生活様式や学習環境に適応し、学級集団での学習や生活を楽しく過ごし、一人ひとりが生き生きと学校生活が送れるように、保育所と幼稚園と学校とが、指導の在り方や育てたい子ども像について連携していくことの大切さを改めて感じた。

つまり一元化には、様々な考え方があるが、今一番大切な一元化というのは、子どもたちの豊かな育ちを願い、保育所・幼稚園・小学校がお互いを知り、理解し合つて子どもたちの豊かな育ちのために何が必要かということ話し合っていくことではないだろうか。

(2) 就学前の子どもたちや

保育所・幼稚園を知る

本研究では、就学前教育の実際や連携の現状を知るために、まず前節で述べたように、子どもたちの豊かな育ちを育てていくために、保育所・幼稚園・小学校が連携していくことが重要ではないかと考え、小学校教員の立場から、就学前の教育を知ることを目的に、保育所と幼稚園との協力を得てフィールドワーク調査を行なった。その日程は、下記のとおりである。

表1-1 調査対象保育所・幼稚園

日程	保育所	幼稚園	小学校校区
7/20・21 23	聚楽 保育所		朱雀第二 小学校
7/26・27 28	壬生 保育所		朱雀第四 小学校
8/30・31 9/1・3	改進 保育所		竹田 小学校
9/6・7 8・10		竹田 幼稚園	竹田 小学校

ここでは、就学前教育の実際を学び、その中で子どもたちや保護者に対して、小学校入学前後に必要な具体的支援の内容や方法について検討するための資料を得ることを目的とした。7月の調査では、保育所という組織や環境を知ることには重点を置き、保育所の一日の生活の流れを知るために、保育所の生活を体験した。8月・9月の調査では、保育所・幼稚園相互の教育を学ぶことに重点を置き、保育所と幼稚園の違いを知るために幼稚園と保育所の一週間の流れを体験した。

観察の視点としては、保育内容については、日課表(生活の流れ)・読み聞かせ・表現活動にポイントを置いた。保育環境については、トイレ・園庭・プール・ランチルームなどにポイントを置いた。生活の状況については、遊びや食事の量そして時間等にポイントを置くこととした。こうして実際に保育所や幼稚園に入らせてもらい、体験したことから、就学前の子どもたちの様子をとらえたり、実際の就学前の保育や指導を知ったりした。

次に、連携の現状はどうなっているのか。それぞれの教職員の意識はどうなっているのか。調査してみることが必要だと考えた。特に連携の現状と連携に対する教職員の意識を問うことで、連携

が深まっているところは、子どもたちに育てたい力などが一致しているのではないか。保護者に対する働きかけも一致しているのではないかなどの仮説を立て調査問題を作成した。

まずA調査は、保育所・幼稚園・小学校それぞれの組織に対して小学校入学前後の連携や交流の現状を把握する9項目の設問による質問紙調査を作成した。調査の構造は、表1-2に示す通りである。できるだけ簡単に答えられるように項目を精選し、シンプルなものにした。

B調査は、保育所・幼稚園・小学校における個々の保育士や教員の入学前後の子どもたちや保護者への働きかけ、および相互の連携に関する13項目の設問による質問紙調査を組み立てた。(表1-3)調査の実施にあたっては、こどもみらい館・保育課の協力を得た。調査の対象は、A調査は、京都市営保育所20所・京都市立幼稚園16園・京都市立小学校178校合計214箇所を実施した。B調査は、京都市営保育所20所4才児5才児担当59名・京都市立幼稚園16園4才児5才児担任42名・京都市立小学校178校1年生担任(今年度在籍なし3校除く175校)各校1名175名合計276名に協力を求めて、2004年9月に実施した。

表1-2 A調査 組織に対しての現状調査項目

合同会議	合同の会議の回数	A 1
	合同の会議の出席者	A 2
	合同の会議の重点	A 3
交流	交流の回数	A 4
内容	交流の内容	A 5
説明会	合同説明会 回数	A 6
	合同説明会 参加者	A 7
	合同説明会の重点	A 8
情報発信	入学へ向けての情報発信の方法	A 9

表1-3 B調査保育士・教職員に対しての意識調査項目

担当	担当年齢	B 1
参観	参観の経験	B 2
身に付けてほしいこと	入学前子どもたちに最も身につけてほしいこと	B 3
	入学後子どもたちに最も身につけてほしいこと	B 4
大切にしていること	入学前後子どもたちに接する上で一番大切にしていること	B 5
保護者への働きかけ	小学校に向けて保護者に働きかけてほしいこと	B 6
連絡会議	連絡の会議の必要性	B 7
	連絡の会議の重点	B 8
交流	交流の必要性	B 9
	交流の目的	B10
合同説明会	合同の保護者説明会必要性	B11
	合同の保護者説明会の良い点	B12
課題	連携充実のための課題	B13

調査の集計については、設問ごとに単純集計を行い、その項目についての傾向を見た。なお、個々の設問に対する回答は、巻末に付表として一覧に提示している。さらに、合同会議の回数と身につけさせたいことなどが、どのようにかかわりあっているのかを分析するために、クロス集計(19)によって項目間の因果関係や関連性を見ることにした。

- (1) 文部省『小学校学習指導要領総則編』東京書籍 1999.5 p.92
- (2) 文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 1999.6 pp.172 173
- (3) 厚生省児童家庭局保育所保育指針チャイルドが本社 1999.10 pp.73 74 75~
- (4) 文部省中央教育審議会『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のありかたについて』(中間報告)2004.11
- (5) 高田一宏大阪府人権教育研究協議会編『わたし出会い発見 Part5』2004.4 p.16
- (6) 新保真紀子『「小1プロブレム」に挑戦する』2001.12 p.14
- (7) 前掲 注(5)p.17
- (8) 前掲 注(6) pp.16 17 18 19 20 21 22~
- (9) 前掲 注(6) p.18
- (10) 京都市保健福祉局福祉部保育課保護者の「子育てについてのアンケート」調査報告 p.43
- (11) 京都市教育委員会『研究紀要 JI-477 家庭教育調査』
- (12) 「京都の保育」社団法人 京都市保育園連盟 p.3
- (13) 師岡佑行 『京都の部落史7史料近代2』1985.9 p.400
- (14) 森田明美『幼稚園が変わる 保育所が変わる—自治体発：地域で育てる保育一元化』2000.8 p.3
- (15) 前掲 注(14) p.3
- (16) 前掲 注(14) p.3
- (17) 中山徹・杉山隆一 保育行財政研究会『幼保一元化—現状と課題— 2004.2 p.9
- (18) 教育課程審議会答申(平成10年7月29日)教育課程の基準の基準の改善にあたっての基本的な考え、各学校段階の役割の基本
- (19) クロス集計：2つのカテゴリー・データの関連を検討する時に行うもの。2変数間の関連の仕方についての基本的な情報を直裁に示すものである。

第2章 質問紙調査を通して

第1節 連携の実際とその意識の現状

(1) 所園校としての連携や交流の現状

第一章で述べてきたように連携や交流の重要性がいわれているが、連携や交流はそう簡単ではない。フィールドワークの時の聞き取りでは、ある保育所では、進学する小学校が9校にも及ぶというのであった。また小学校でも、保育所や幼稚

園それぞれ公立・私立を合わせると10箇所以上にも及ぶことが多々ある中、本調査では、まず小学校として連携を進めやすい公立の所・園に対象をしばった。

京都市においては連携はどのような現状にあるのだろうか。まず合同の会議の回数から、その現状を見た。

図2-1 合同会議の回数

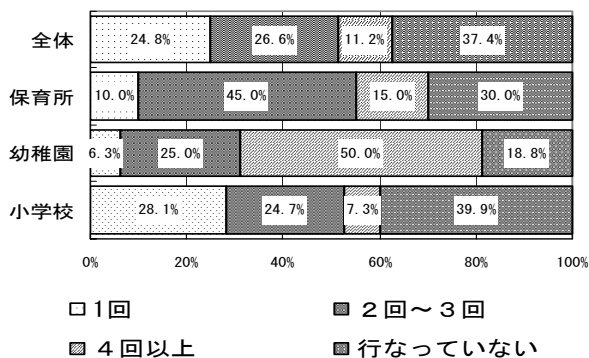
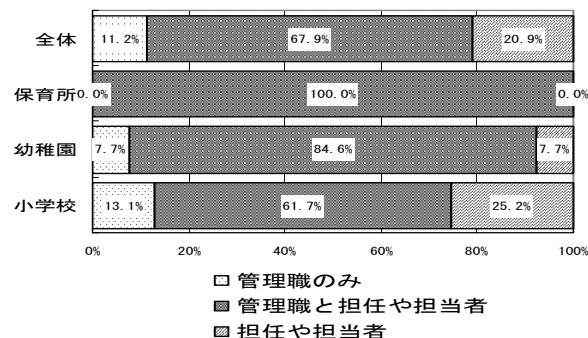


図2-1で示す保育所・幼稚園と小学校との間で、A調査設問1「年に何回合同会議が行われていますか」の回答結果を見ると、全体として62.6%は、1回以上合同の会議を実施している。一方で、37.4%もが実施できていない現状がある。校種別に見ると保育所では70%が合同会議を行っている。幼稚園では、81.3%が合同会議を行っており、そのうち50.0%が4回以上合同会議を行なえているということがわかる。しかし小学校では、60.1%しか合同会議は実施されていない。連携が必要といわれながら、充分に進んでいない現状があるといえるのではないかと。その中で幼稚園が、50.0%も4回以上合同会議が開けているのは、市立幼稚園と市立小学校が隣接して設置されているところが多いことも関係していると思われる。

では、現在行われている合同の会議では、誰が出席し、どのようなことに重点を置いて話し合いが進められているのだろうか。

図2-2A調査設問2「その会議には、主に誰が出席していますか」の回答結果を見ると、現在行

図2-2 合同会議の出席者



われている会議では、管理職のみが出席しているのは11.2%にとどまり、88.8%のところでは、担任や担当者が出席して行われている。保育所においては、100%管理職と担任や担当者が出席して合同の会議が行われている。しかし、幼稚園・小学校となるにつれ、管理職のみまたは、担当者のみによる会議が、増加していく。

図2-3 合同会議での重点

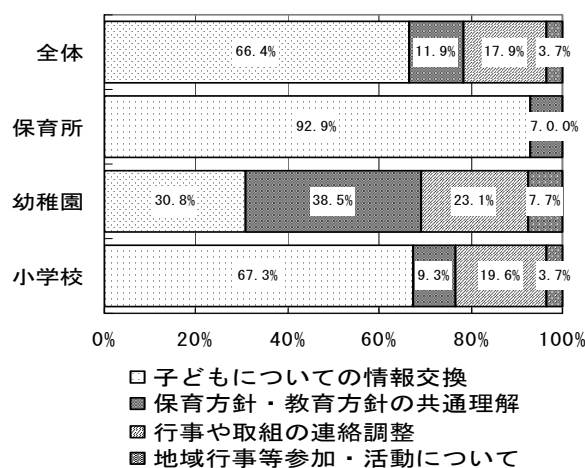
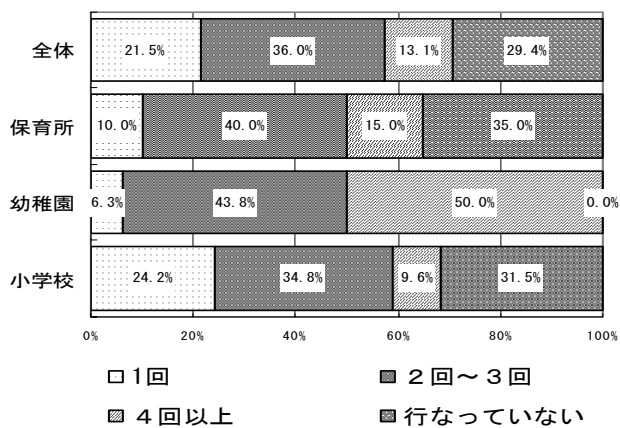


図2-3で示す、A調査設問3「それらの会議では、主にどのような内容に重点を置いて話し合われていますか」の回答結果を見ると、保育所においては92.9%子どもについての情報交換に重点をおいており、小学校でも、67.3%がそこに重点をおいている。幼稚園では、38.5%もが保育方針や教育方針の共通理解に重点を置いている。また、幼稚園や小学校で行事や取組の連絡調整が20%ほどにのぼるのは、前述したように隣接していることが大きいと考えられる。

次に図2-4で示す、子ども同士の交流について、A調査設問4「幼児と小学校児童と一緒に活動する交流は、年に何回おこなわれますか」の回答結果を見ると、全体では現在交流を行っている所は

図2-4 交流の回数



70.6%であり、幼稚園では100%交流が行われている。

しかもそのうち4回以上が50.0%にのぼり交流が熱心に行われていることがわかる。

図2-5で示す、A調査設問5「問4で行っている幼児と小学生の交流は、どのようなものですか」の回答結果を見ると、以下のようになった。

図2-5 交流の種類選択数

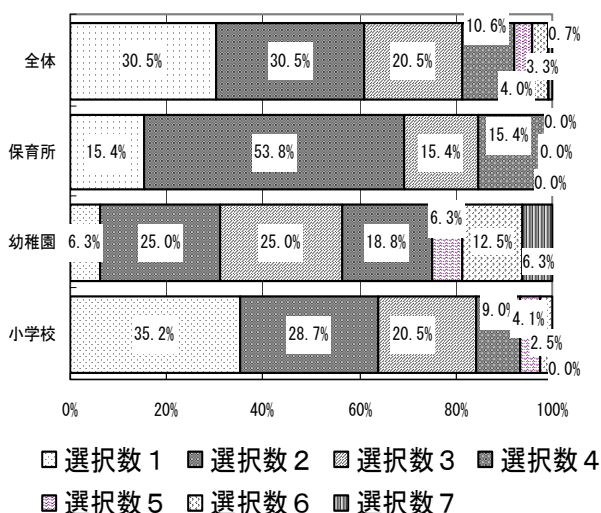


表2-1 選択肢の種類

問5の選択肢の種類	
1	小学校の運動会や学芸会を幼児が参観する
2	小学校の運動会や学芸会に幼児が参加する
3	生活科の授業などに幼児が参加する
4	小学校のプールでの活動に幼児が参加をする
5	小学校の給食を幼児と一緒に試食する
6	保育所・幼稚園に出かけて児童が活動する
7	地域が主催する行事とともに参加する
8	その他（具体的にお答えください）

この設問では、交流している項目をすべて選択してもらったので、図2-5では、どのような交流をしているかというよりも何種類の交流をしているか、という結果になっている。この結果を見ると、幼稚園では様々な交流がなされており、中には7種類以上の交流をしているところもあることがわかる。

次にここでは、相対的にどのような交流が行われているか表2-2から見てみたい。保育所では、「保育所に出かけて児童が活動する」が55.0%で最も多い。幼稚園では、「小学校の運動会や学芸会を幼児が参観する」と「生活科の授業などに幼児が参加する」が75%とともに極めて多い。小学校

では、「小学校の運動会や学芸会を幼児が参観する」が41.1%と最も多い。その他児童集会や音楽集会に幼児が参加したり、半日入学等で児童と幼児と一緒に活動したり、様々な交流が挙がっていた。

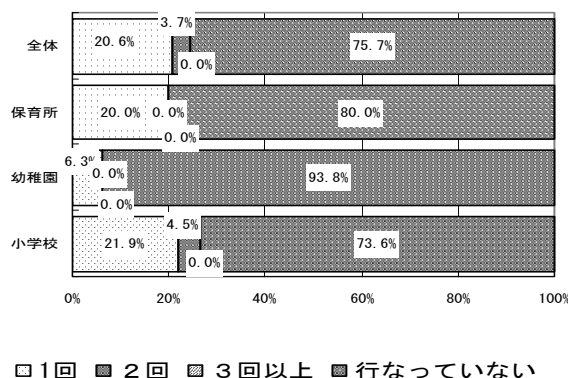
表2-2 交流の種類

選択肢	保育所	幼稚園	小学校
1. 小学校の運動会や学芸会を幼児が参観する	<u>45.0%</u>	<u>75.0%</u>	<u>41.1%</u>
2. 小学校の運動会や学芸会に幼児が参加する	0.0%	12.5%	8.0%
3. 生活科の授業などに幼児が参加する	30.0%	<u>75.0%</u>	<u>28.0%</u>
4. 小学校のプールでの活動に幼児が参加する	0.0%	<u>62.5%</u>	8.6%
5. 小学校の給食を幼児と一緒に試食する	0.0%	<u>50.0%</u>	5.1%
6. 保育所・幼稚園に出かけて児童が活動する	<u>55.0%</u>	37.5%	<u>32.6%</u>
7. 地域が主催する行事とともに参加する	15.0%	<u>43.8%</u>	20.0%
8. その他（具体的にお答えください）	10.0%	0.0%	13.7%

(複数回答)

図2-6は、A調査設問6「貴校では小学校入学に臨んでの保護者への説明会を幼稚園や保育所に来てもらったり幼稚園や保育所の説明会に参加したりなど合同では何回行っていますか」の回答結果である。

図2-6 合同の保護者説明会回数

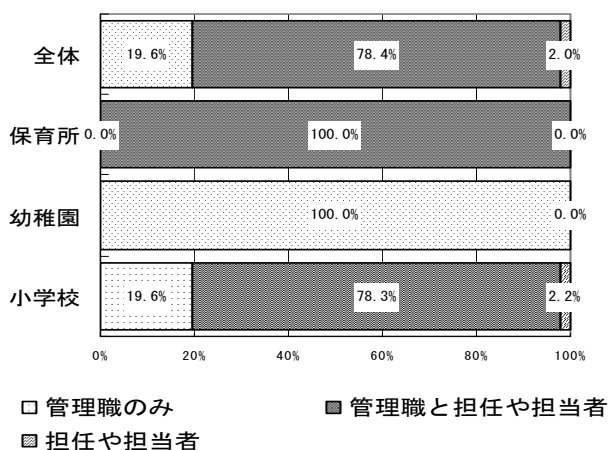


ここでは、最も多い小学校でさえ、2回が4.5%、1回でも21.9%ときわめて少ない。3回以上は、いずれも0%であった。このことは、改善の余地があるのではないだろうか。

では、合同の保護者説明会を行っている所は、誰が参加しているのだろうか。校種によって違いはあるのだろうか。

図2-7で示すA調査設問7は、実施している所のみに「その合同の保護者への説明会には、貴校の主に誰が参加していますか」の回答を求めた結果である。

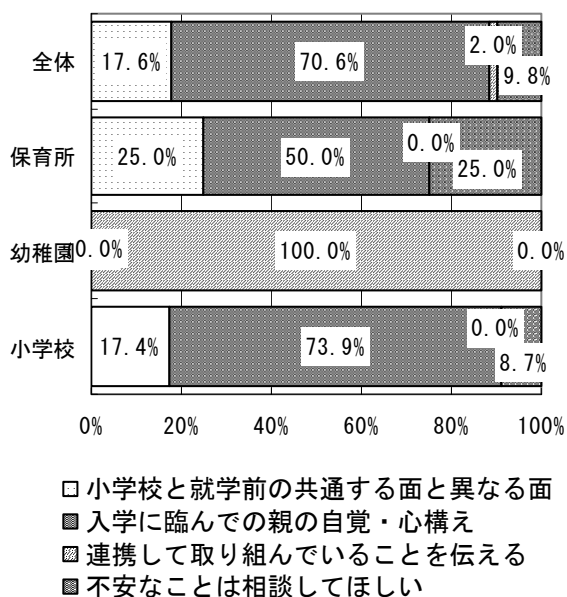
図2-7 合同の保護者説明会の参加者



保育所では、参加しているのは100%管理職と担任や担当者であるが、それに対して幼稚園では100%管理職のみが参加している。参加者が異なるということは、説明会の内容や重視していることなどに違いがあるのだろうか。

図2-8で示す、A調査設問8「合同の保護者への説明会で学校（保育所・幼稚園）として特に重視して伝えようとしていることは、どのようなことですか」の回答結果を見ると、合同の説明会を

図2-8 合同保護者説明会で重視していること



行っているところの70.6%が小学校入学にむけての親の自覚・心構えを伝えることに重点を置いている。保育所や小学校では、小学校教育と就学前教育の共通する面と異なる面を説明することや不安なことは気軽に相談してほしいことを伝えることにも重点が置かれている。幼稚園では、連携して取り組んでいることを伝えることに重点が置かれている。

幼稚園に見られるこの特徴は、前述したように幼稚園が小学校と隣接しており、合同会議が多く、交流も多くもっているため、日常的に親が小学校のことを知っており、重点の置き方が違うと考えられる。そこで合同会議についてもう少し詳しく見てみることにした。

図2-9 合同会議の回数別合同会議の出席者

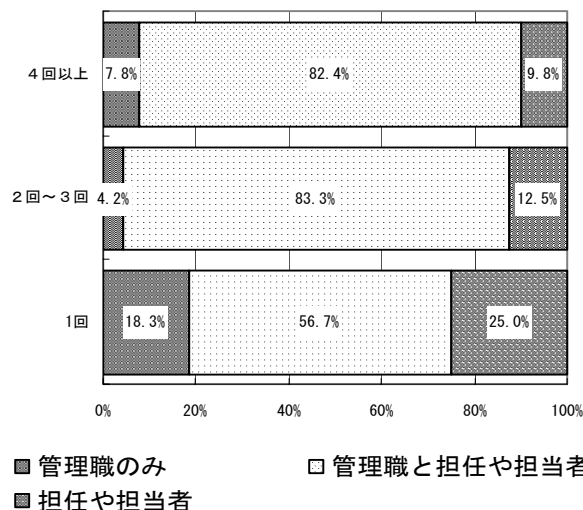
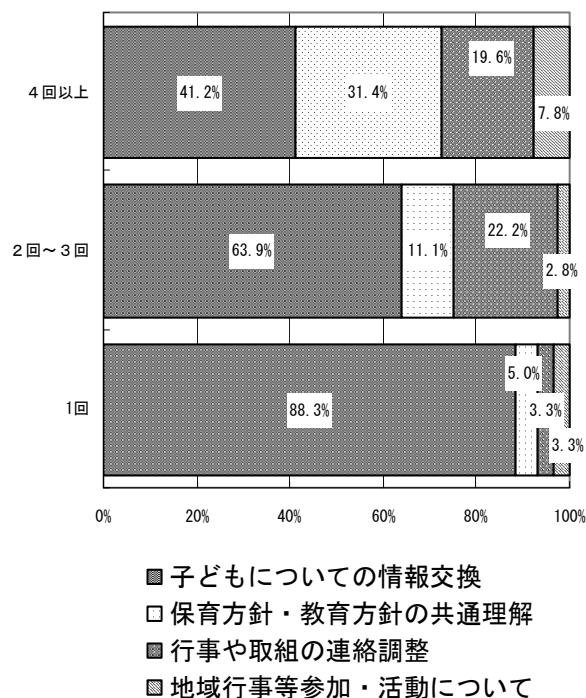


図2-9は合同会議を実施しているところでの、回数別の出席者を表わしたものである。会議の回数が2回以上になると、出席者も、管理職・担任・担当者の参加が、80%を超え、合同会議の回数が多いほど、多様な人が参加しているといえる。

次は、その会議の内容であるが、次ページで示す図2-10は合同会議を実施しているところでの回数別の内容を表わしたものである。合同会議1回の所は、88.3%が子どもについての情報交換である。合同会議2回～3回と回答したところでは、22.2%が行事や取組の連絡調整が、子どもについての情報交換について、2番目に挙がってきている。4回以上と回答したところでは、子どもについての情報交換について、31.4%が保育方針や教育方針の共通理解を挙げている。このことから、現在行われている合同会議では、まず子どもについての情報交換が行なわれ、回数が増えるにつれて、内容が多様になっていくことがわかる。

図 2-10 合同会議の回数別合同会議の内容



また出席者の違いは、会議の内容にもかかわってくるのであろうかと考えた。そこで合同会議の出席者別合同会議の内容を見てみることにする。

図 2-11 合同会議の出席者別合同会議の内容

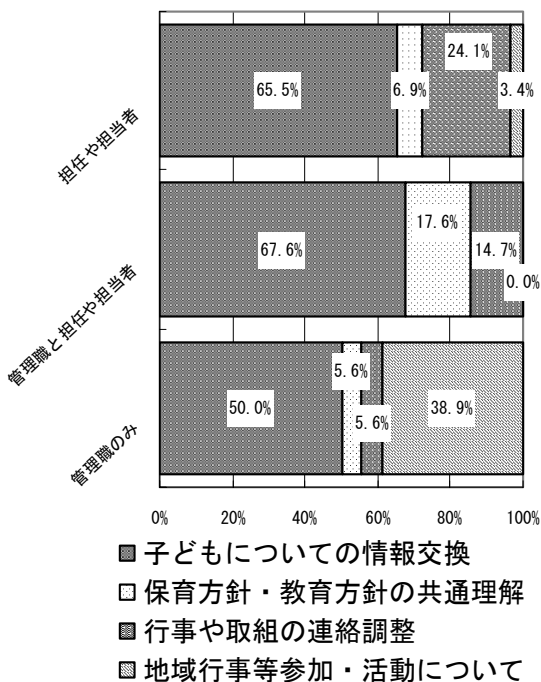


図 2-11 からわかるように、管理職のみが出席している会議の場合は、地域の行事等の参加・活動についての相談が、38.9%しめている。しかし、

管理職と担任や担当者が出席している場合には、子どもについての情報交換が 67.6%をしめ、保育方針や教育方針の共通理解も 17.6%にのぼる。

こうして見てくると、合同会議の回数が多いほど、管理職と担任や担当が参加しているところが多く、子どもについての情報交換や保育方針や教育方針に重点を置いて話し合いが行われていることがわかる。

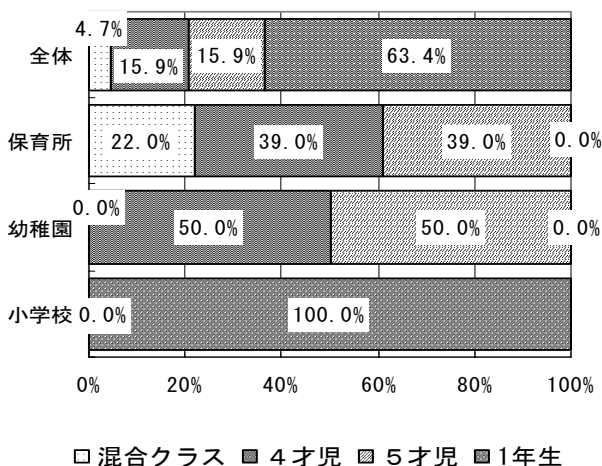
このように、連携を深め豊かな交流へと進めていくためには、管理職と担当者が共に出席し、子どもについての情報交換と互いに保育方針や教育方針を話し合うことがポイントではないだろうか。子どもについての情報交換と保育方針や教育方針の理解ということが連携への大切なキーワードとなると考える。

(2) 保育士や教職員の意識について

前項では、組織としての連携の現状や交流の現状を見てきた。そこで本項では、京都市の保育所の保育士や幼稚園や小学校の教職員は、連携や交流に対してどのような意識をもっているのか、また子どもについての情報交換や保育方針や教育方針の理解などが重要だと考えているのか、さらにお互いの保育や教育を参観した経験はあるのかということについて、その現状を明らかにしたいと考えた。

そこで、京都市営保育所・市立幼稚園・市立小学校総計 276 名を調査対象として調査を行った。図 2-12 は、B 調査設問 1「あなたが担当しているクラスを教えてください」の回答結果である。これを見ると、幼稚園では、混合クラスの担任はないことがわかる。

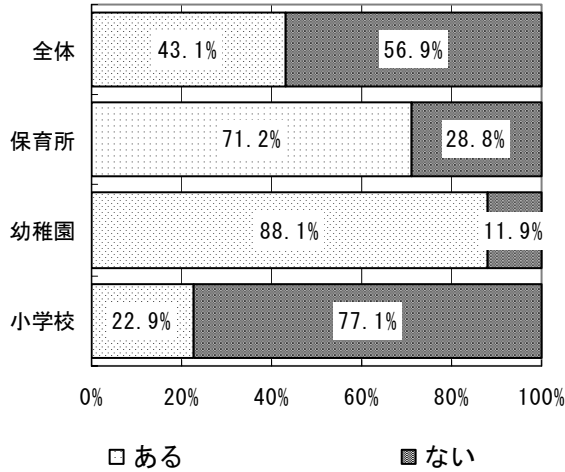
図 2-12 担当クラス



また全体の63.4%が1年生担任である。

このうちのどれだけの者が、お互いの参観を経験しているのかを、設問2、「あなたが入学前後の子どもたちの様子を知るために参観に行ったことはありますか」で尋ねた図2-13を見ると、幼稚

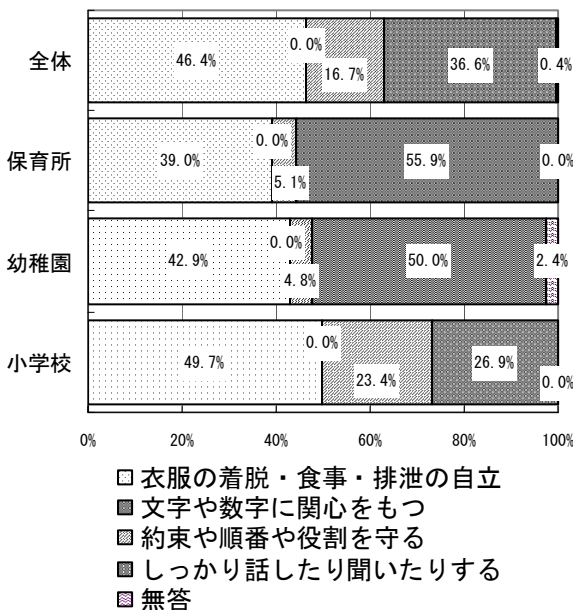
図2-13 参観の経験



園では88.1%、保育所では71.2%が参観経験があるのに対して、小学校の参観経験は、22.9%にとどまっている。所属によって参観の経験には大きな違いがあり、小学校では、ほとんどが参観経験がないことがわかる。

次に、図2-14 設問3「入学前の子どもたちに最も身につけてほしいことはどのようなことですか」の回答結果をみると、入学前に身につけてほ

図2-14 入学前に身につけてほしいこと

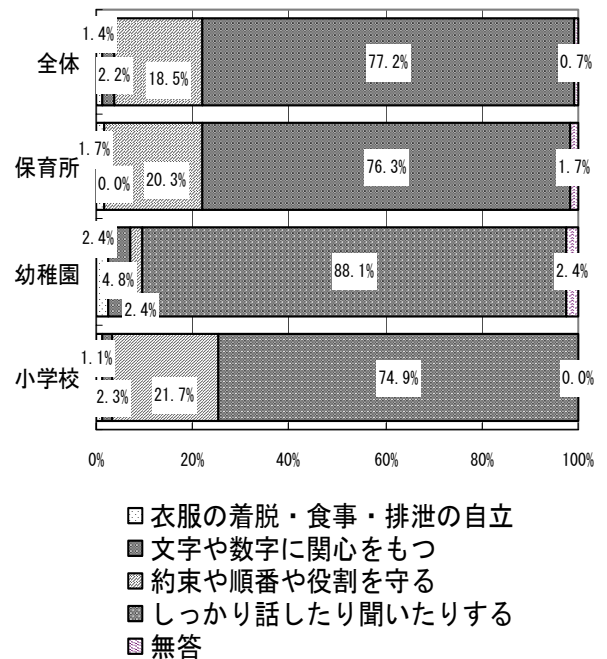


しいこととして「文字や数字に関心をもつ」を選択した者は、いずれの所属でもなかった。しかし、保育所や幼稚園では、「しっかり話したり聞いたりする」を選択している者が50%ほどにのぼった。これは授業参観などの結果聞くことや話すことが大切と感じた者が多いからだと言えるのではない

か。逆に小学校では、「衣服の着脱・食事・排泄の自立」で49.7%を示しているが、「しっかり話したり聞いたりする」を選択している者が26.9%いる。また「約束や順番や決まりを守る」を選択している者が23.4%にのぼるのは、小学校の授業を意識しての事だと考えられる。

図2-15は、設問4「入学後の子どもたちに、最も身につけてほしいことはどのようなことですか」の回答結果である。

図2-15 入学後に身につけてほしいこと



どの所属においても、「しっかり話したり聞いたりする」を選択している者が多い。特に幼稚園では88.1%もの者が「しっかり話したり聞いたりする」を選択している。また、小学校と保育所、双方が20%ほど「約束や順番や役割を守る」を選択している。しっかり話したり聞いたりする力、約束や順番や役割を守る力を育てるということが、連携へのキーワードといえないだろうか。

このような入学前後に求めることに対して、それぞれの保育士や教職員はどのようにかかわっているのだろうか。

図2-16 入学前後1番大切にしていること

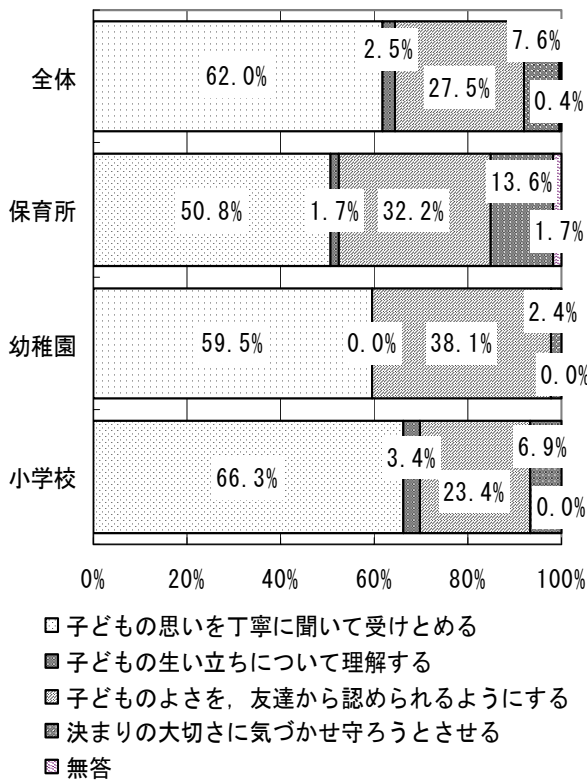


図2-16で示す、設問5「あなたが、入学前後の子どもたちに接する上で1番大切にしていることはどのようなことですか」の回答結果について見ると、全体では、「子どもの思いを丁寧に聞いて受けとめる」が62%をしめており、「子どものよさを、友だちから認められるようにする」が、27.5%を示している。

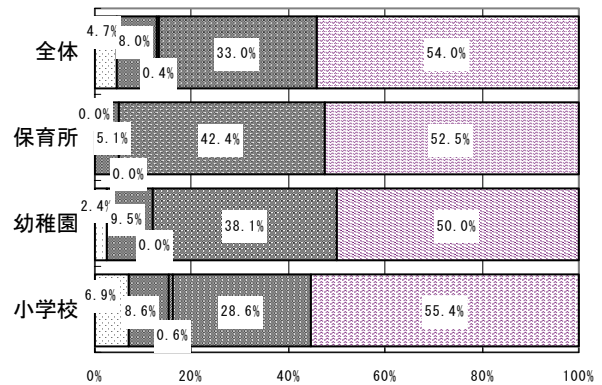
幼稚園では「子どものよさを、友達から認められるようにする」が38.1%ある。保育所でも、32.2%が、「子どものよさを、友だちから認められるようにする」を挙げている。この傾向は、三者変わらない。

その中で、保育所では、「友達と活動する中で決まりの大切さに気づかせ守ろうとさせる」の選択が13.6%ある。このことから、小学校入学にむけて、子どもたちに決まりの大切さを身につけさせたいと取り組んでおられる様子がわかるのではないかと。

次は様々な悩みを抱える保護者に、保育士や教員はどのように子どもたちに接してほしいと考えているかを尋ねた。設問6「小学校入学にむけて保護者が、子どもに最も働きかけてほしいことはどのようなことですか」の回答結果、図2-17を見ると、保育所・幼稚園・小学校とも、保護者に

働きかけてほしいこととして、「生活リズムを整えておくこと」を50%以上が選択している。小学校入学にあたり子どもの生活リズムを整えておくことが、保育所・幼稚園・小学校のどの校種においても、最も大切だと考えている者が多いといえるのではないだろうか。また、保育所や幼稚園では、40%前後が、「子どもの思いをしっかりと聞くこと」を、挙げているのは、幼児期の子どもの思いをしっかりと聞くことを大切にしてほしいと考えていることがわかる。

図2-17 保護者が子どもに働きかけてほしいこと



- 好き嫌いをなくし、食の楽しさを経験させる
- 読み聞かせや、子どもの遊びにかかわる
- ▨ 地域行事などで様々な経験をさせる
- 子どもの思いをしっかりと聞く
- 生活リズムを整えておく

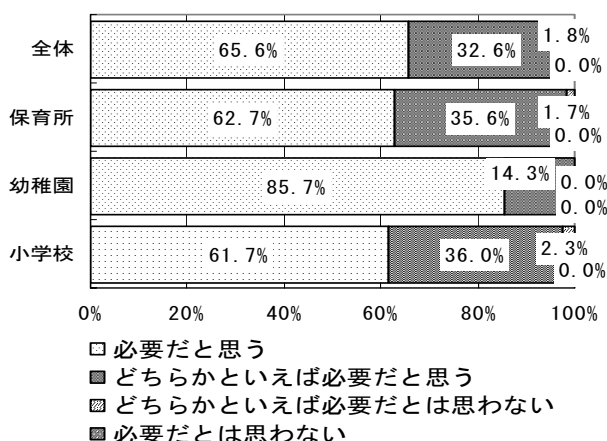
さらに、小学校において食べ物の好き嫌いをなくし、食の楽しさを経験させることが6.9%挙がってきているのは、子どもたちの好き嫌いが給食指導に大きく影響するため、それが子どもによっては入学時のとまどいとなることもあるので、家庭での働きかけを、重要だと考えているとはいえないだろうか。

こうして見ると、京都市の保育士や教員は、一人ひとりの子どもたちの思いを丁寧に受けとめ、一人ひとりの子どもたちのよさを友達から認められるようにすることを1番大切に、日々実践していることがわかる。

入学は、集団が変わり指導者も変わる節目である。その子どもたちにかかわる保育士や教員は、連携についてどのような意識をもっているのだろうか。連携することが必要だと考えているのか。また、どのようなことに重点を置いて連携していけばよいと考えているのだろうか。

設問7「あなたは、保育所または幼稚園が小学校と一緒に話し合いや連絡のための会議をもつこ

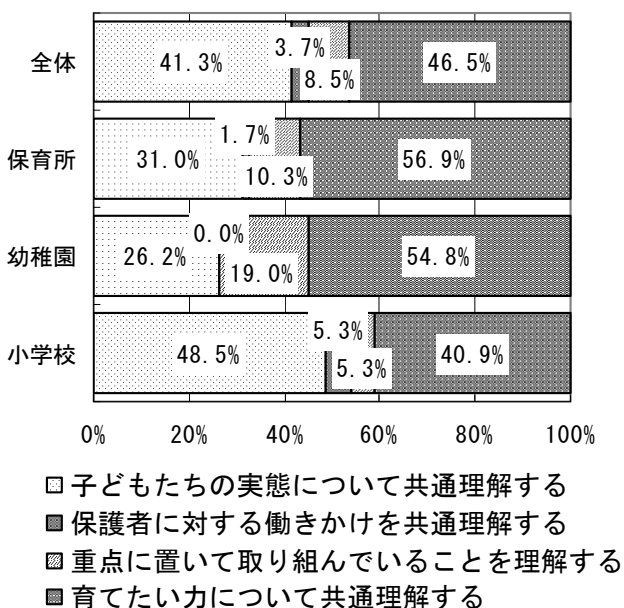
図 2-18 連絡会議の必要性



とについて必要だと思いますか」の回答結果、図 2-18 を見ると、連絡会議について、幼稚園では 85.7%が必要だと考え、「どちらかといえば必要だと思う」を入れると 100%が必要だと考えている。これは小学校との取組をしたいことの現れである。小学校で 97.7%、保育所で 98.3%が、必要だと回答し、多くの者が、連絡会議を必要だと考えていることがわかる。

では、その連絡会議の内容においては、どのようなことに重点を置けばよいと考えているのだろうか。設問 8「問 7 そうした会議では、最も重視して話し合うことはどのようなことだと思いますか」の回答結果、図 2-19 を見ると、小学校においては、48.5%が、子どもたちの実態について共通理解することを挙げている。これは様々なところから入学してくる子どもたちを知りたいという

図 2-19 連絡会議で重視したいこと



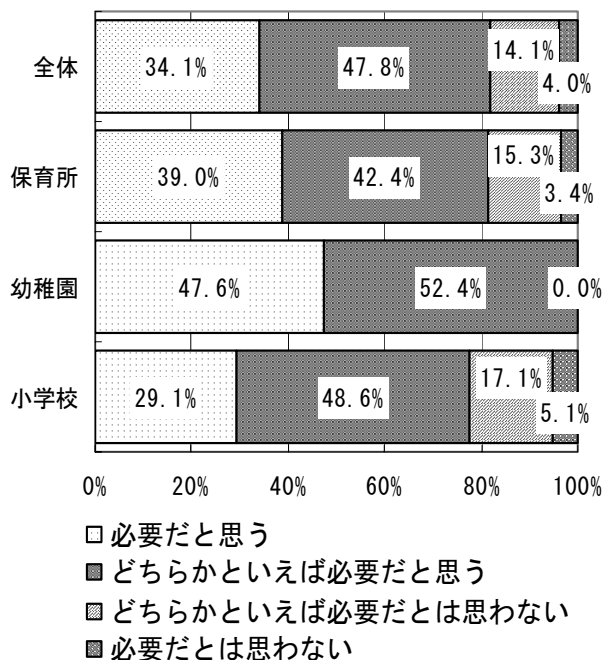
ことの現れではないか。

保育所や幼稚園では、育てたい力について共通理解するが 50.0%を超えている。小学校においても 40.9%が育てたい力の共通理解を選択している。このことから子どもたちの育ちをつなげていきたいと考えていることがわかる。

一方、保育所で 10.3%、幼稚園で 19.0%が、「重点をおいて取り組んでいることを理解する」を挙げていることは、小学校の取組を知りたいことの現れである。しかし、8 ページ図 2-3 で示す合同会議での重点では、実際には、保育方針・教育方針の共通理解は、全体で 11.9%であり、子どもについての情報交換にとどまっているのが現状である。

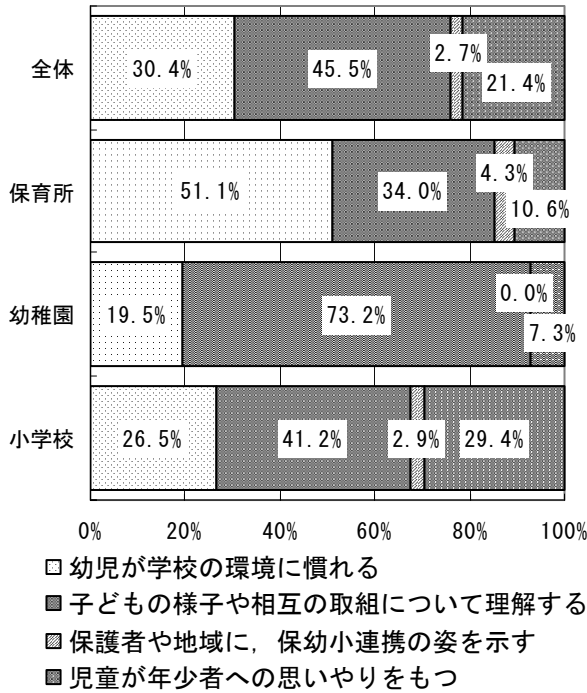
では交流についてはどうだろう。設問 9「幼児や児童と一緒に活動する交流は必要だと思いますか」の回答結果、図 2-20 を見ると、「必要だと思う」・「どちらかといえば必要だと思う」を合わせて、幼稚園では 100%が交流を必要だと考えている。

図 2-20 交流の必要性



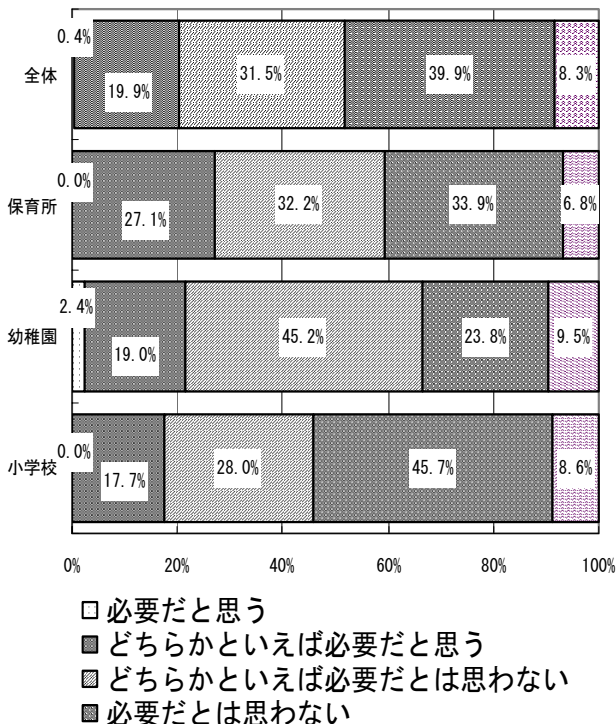
保育所では 81.4%、小学校でも 77.7%が必要だと考えていることがわかる。このように多くの者が交流の必要性を感じていることがわかるが、その交流ではどのようなことを目的としているのだろうか。そこで、設問 9「そうした交流では、最も重要な目的はどのようなことだと思いますか」の回答結果、次ページ図 2-21 を見ると、全体で

図 2-21 交流の目的



は、担当者が子どもの様子や相互の取組について理解を深めるが 45.5%である。保育所では、幼児が学校の環境に慣れるが 51.5%をしめる。小学校では、児童が年少者への思いやりをもつが 29.4%をしめる。幼稚園では、子どもの様子や相互の取

図 2-22 合同保護者説明会の必要性

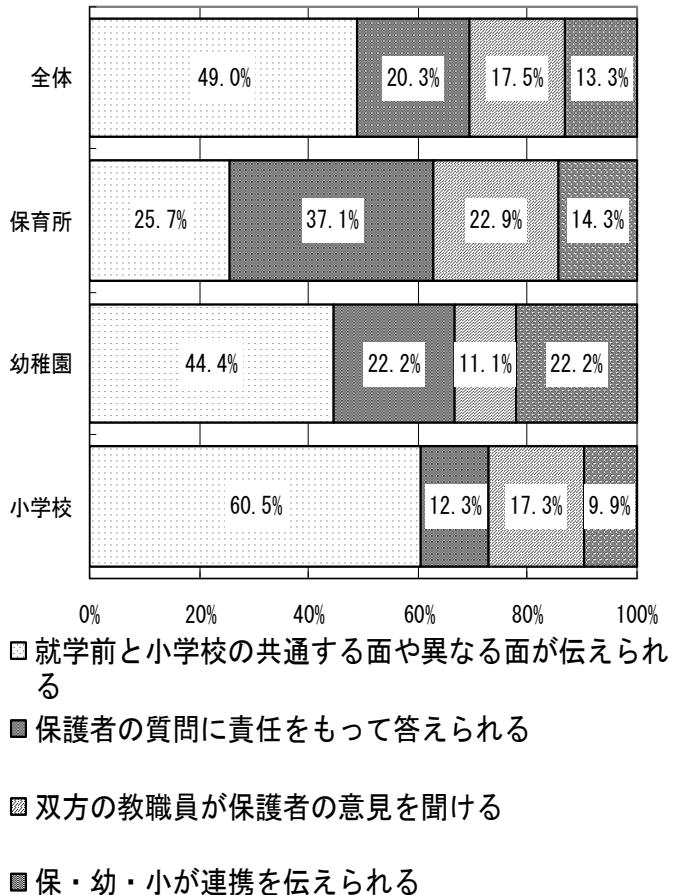


組について理解するが 73.2%となり、所属によっての違いが表われた。

設問 11 の「小学校入学にむけての保護者説明会を保育所・幼稚園・小学校が合同で行うことは必要だと思いますか」の回答結果、図 2-22 を見ると、合同の保護者説明会を必要だと思っているのは、全体でも「どちらかといえば必要だと思う」を入れても、連絡会議や交流の必要性と比べると 20.3%と少ない。A調査で見た現状と同じ傾向である。

そこで、必要だと考えている者は、合同説明会の良い点をどのようにとらえているのだろうか。設問 12 「合同でやることの最もよい点はどのようなことだと思いますか」の回答結果、図 2-23 を見ると、合同説明会を行っているところでは、全体では、49.0%が、小学校では 60.5%の者が「就学前と小学校の共通する面と異なる面が伝えられる」を挙げている。保育所においては、37.1%が、「保護者の質問に責任をもって答えられる」を挙げており、保護者の不安に責任をもって応えていこうとしていることがわかる。

図 2-23 合同保護者説明会のよい点



第2節 連携・交流の現状と その意識との関連について

(1) 参観経験による意識の違い

参観経験のあるものとなないものとは、入学前に子どもたちに身につけてほしいことに違いがあるのだろうか。

図2-24 参観経験別入学前身につけてほしいこと

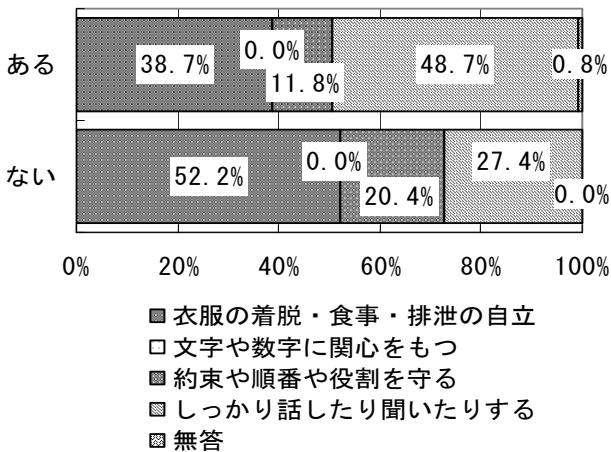
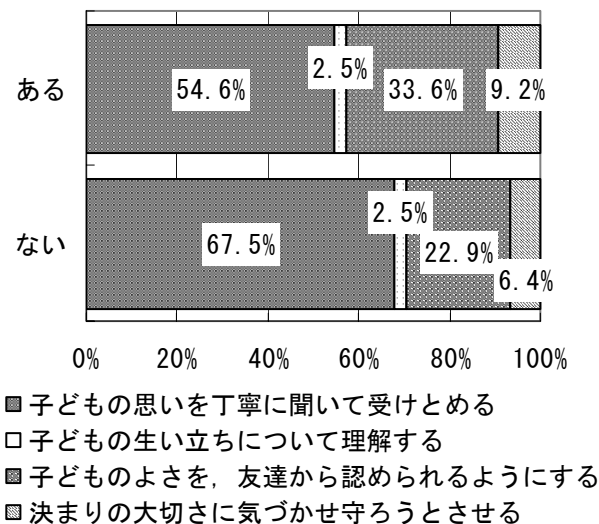


図2-24を見ると、参観経験のある者となない者とは、大きな違いがあることがわかった。参観経験がないものは、衣服の着脱や・食事・排泄の自立を挙げている者が52.2%をしめているが、参観経験のある者では、しっかり話したり聞いたりを挙げている者が48.7%をしめている。実際に参観した者が、小学校入学前の子どもたちに、最も身につけてほしいこととして、しっかり話したり聞いたりすることを挙げているということは、連携していく時の大切なキーワードとなると考える。

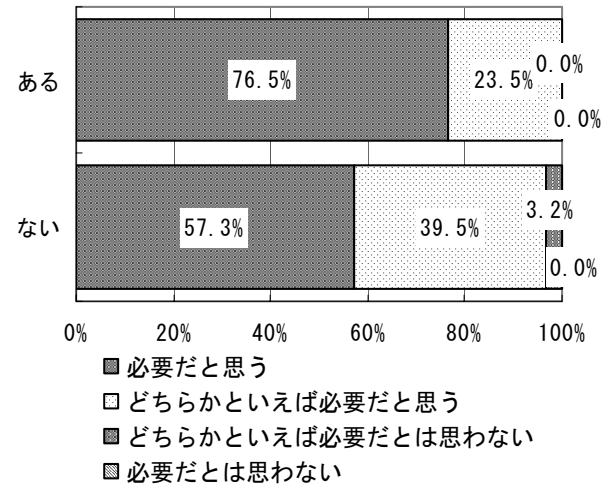
図2-25で示す、参観経験別の「入学前後1番大切にしていること」を見ると、参観経験のある者

図2-25 参観経験別入学前後1番大切にしていること



では、「一人ひとりの子どものよさを、まわりの友だちから認められるようにすること」を挙げているのが、33.6%をしめている。集団が変わる中で、一人ひとりの良さを集団に広めようと考えていることがわかるのではないかな。

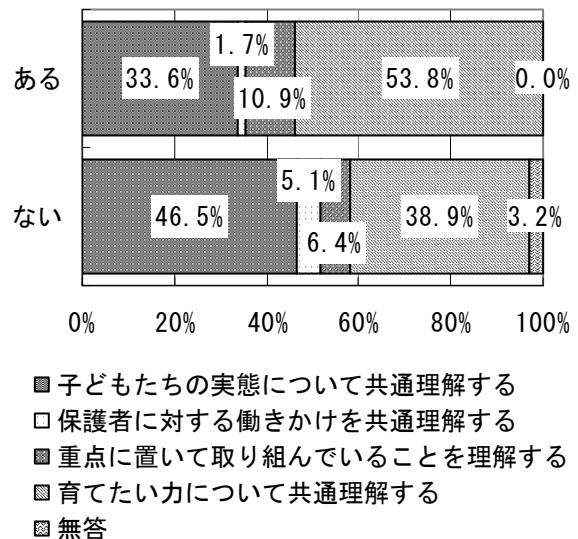
図2-26 参観経験別連絡会議の必要性



参観経験別連絡会議の必要性についての回答結果、図2-26を見ると、参観経験のある者は、「どちらかといえば必要だと思う」を入れると、100%が連絡会議を必要だと考えていることがわかる。「必要だと思う」を選択している者も、76.5%にのぼる。このことから実際に参観して、その必要性を感じている者が多いといえる。

では、参観経験のある者は、会議ではどんなことを重視すればよいと考えているのだろうか。そこで参観経験別連絡会議で重視すること、図2-27を見ると、参加経験のある者は、連絡会議におい

図2-27 参観経験別連絡会議で重視すること

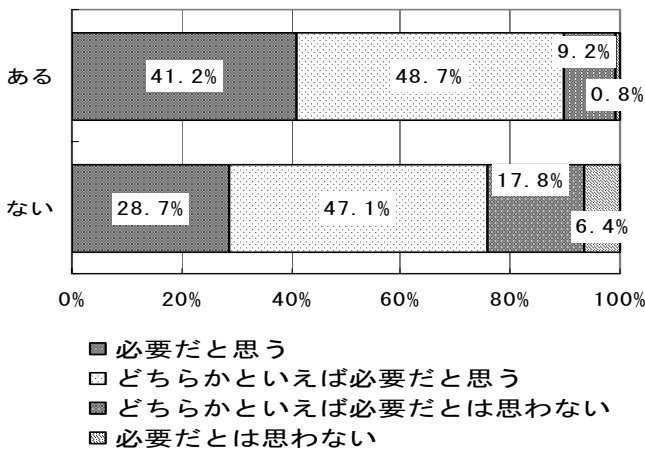


て育てたい力について共通理解することを重視していることがわかる。子どもたちの様子を見て、育てたい力を共に話し合う必要性を感じているといえる。

では交流については、どうだろうか。参観経験別交流の必要性をたずねた回答結果、図2-28を見ると、参観経験のある者は、41.2%も交流を必要だと考えていることがわかる。どちらかといえば必要だと思うを入れると89.9%ものが必要だと考えていることがわかる。

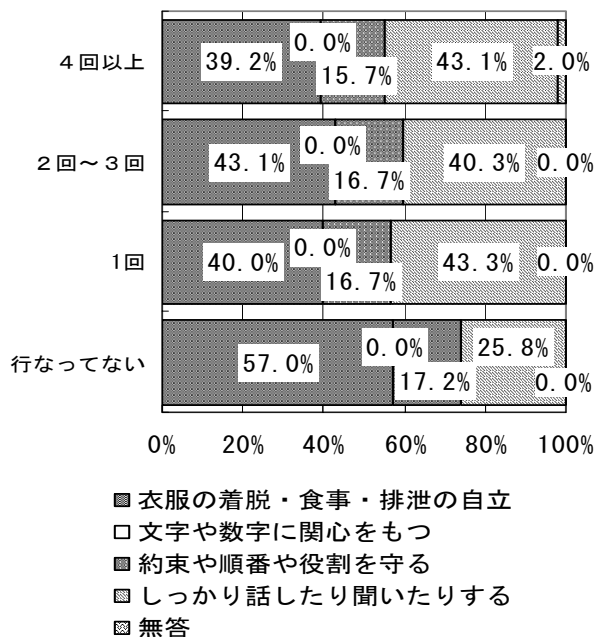
こうして見ていくと、参観経験のある保育士や教員は、子どもたちにしっかり話したり聞いたりする力など、育てたい力について、連絡会議で話し合うことが大切だと考え、交流についても必要だと考えているといえるのではないだろうか。

図2-28 参観経験別交流の必要性



(2) 合同会議や交流回数による意識の違い

図2-29 合同会議の回数別入学前身につけてほしいこと

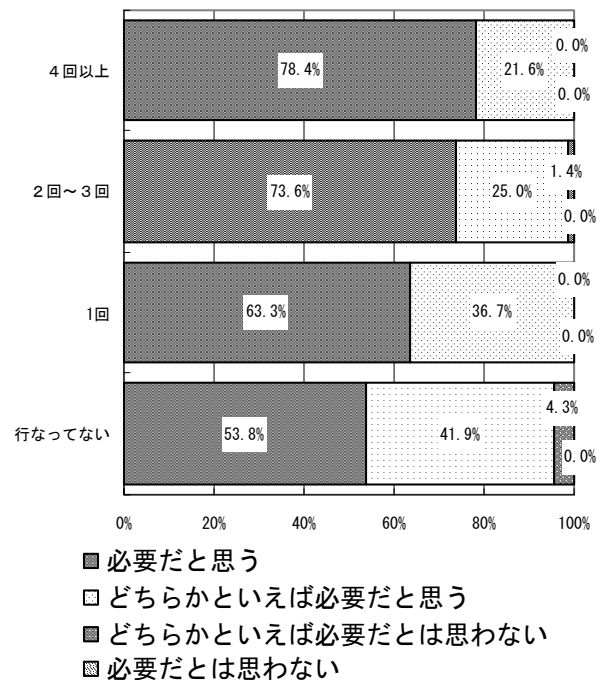


現在合同の会議を行っているところと、そうでないところとでは、子どもたちに対する意識や連携や交流に対する意識が違うのだろうか。入学前子どもたちに身につけてほしいことに違いがあるか図2-29で見た。

合同会議を行っているところでは、入学前子どもたちに身につけてほしいこととして、しっかり話したり聞いたりすることを選択している者が40%以上を示している。連携のキーワードとしてしっかり話したり聞いたりすることがポイントになるといえるのではないだろうか。

次に、図2-30で合同会議の回数別連絡会議の必要性を見た。合同会議を行っている所は、連絡会議を必要だと考えているのではないかと考えていたのだが、実際はどうかのよう。

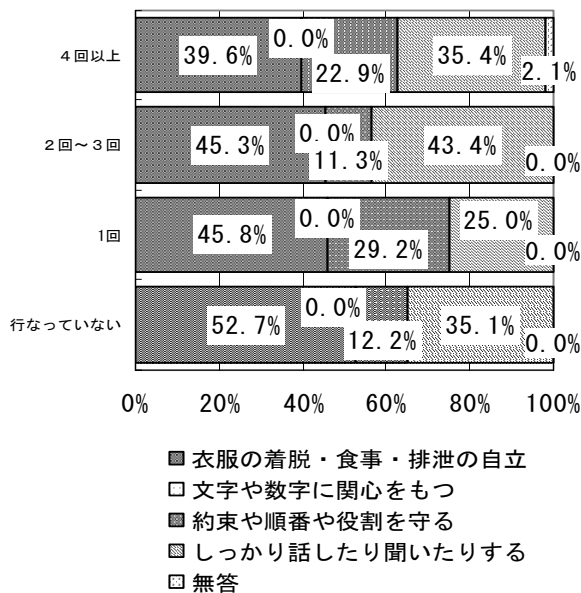
図2-30 合同会議の回数別連絡会議の必要性



合同会議を行っているところほど、連絡会議が必要だと考えている者が多いことがわかる。合同会議を4回以上行っているところでは、78.4%の者が連絡会議を必要だと考えており、「どちらかといえば必要だと思う」を入れると100%が必要だと考えている。

では、交流をすすめているところでは、どのような意識をもっているのだろうか。交流の回数によって、入学前身につけてほしいことなどに違いはあるのだろうか。次ページで示す、図2-31は交流の回数別入学前身につけてほしいことを見たものである。

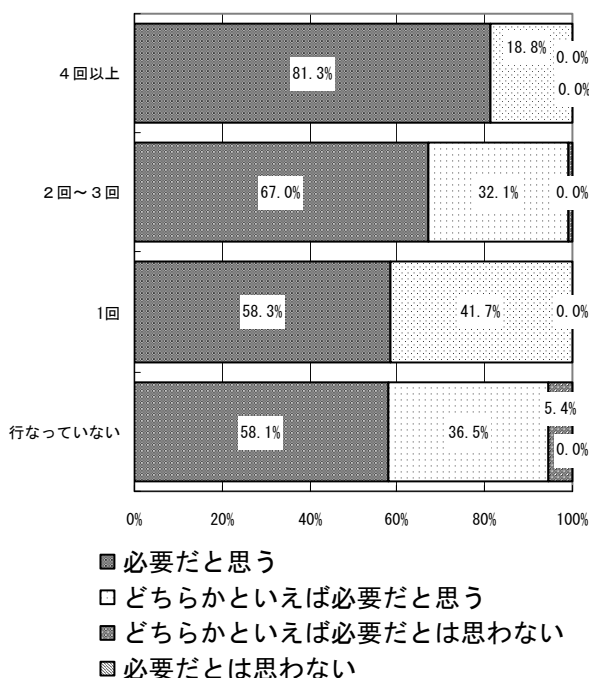
図2-31 交流の回数別入学前身につけてほしいこと



交流の回数が多いほど、入学前の子どもたちに最も身につけてほしいこととして、「衣服の着脱・食事・排泄などを自分ですること」を選択している者が減っていく。

しかし、「約束や順番や役割を守ること」や「しっかり話したり聞いたりすること」が増加の傾向にある。これは交流によってそれぞれの子どもの実態を知った者は、「しっかり話したり聞いたりすること」や「約束や順番や役割を守ること」を身につけてほしいと考えているということではないだろうか。

図 2-32 交流の回数別連絡会議の必要性

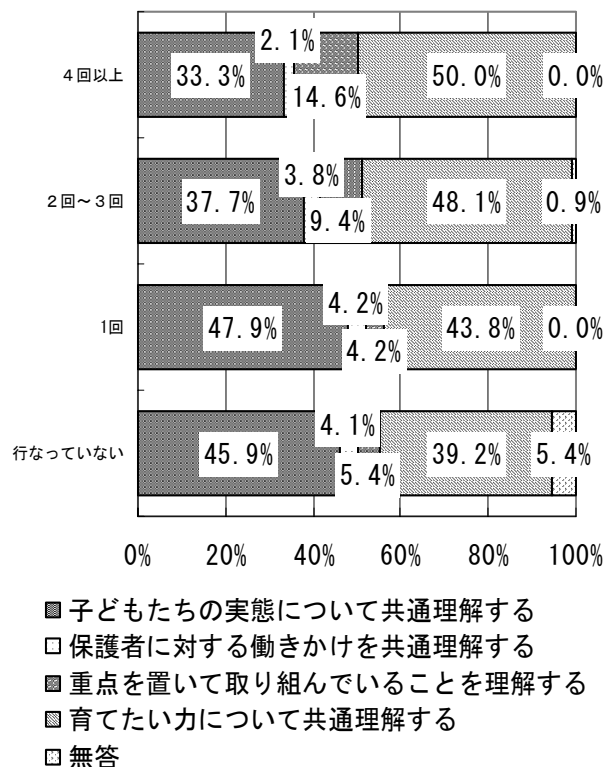


次は連絡会議の必要性を左下記で示す図 2-32 で見た。

交流の回数別連絡会議の必要性をみると、交流を行っているところほど、連絡会議が必要だと考えていることがわかる。交流を4回以上行っているところでは、81.3%の者が、連絡会議を必要だと考えている。交流し子どもの実態を見て、話し合う必要性を感じているといえるのではないか。

交流の回数によって、連絡会議で重視したいことに違いがあるのだろうか。図 2-33 で交流の回数別連絡会議で重視したいことを見た。

図2-33 交流の回数別連絡会議で重視したいこと

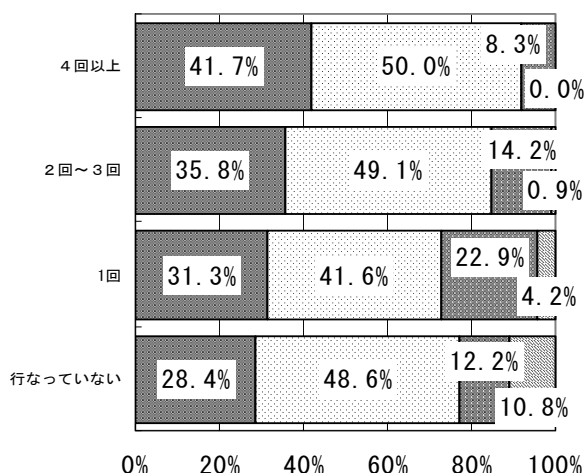


交流の回数が多いほど「育てたい力を共通理解すること」を重視する考えが、増加しているといえる。交流4回以上では50.0%が、「育てたい力について共通理解をする」を挙げている。

また、「重点において取り組んでいることを理解し合うこと」も、交流の回数が増えるごとに増加し、交流4回以上では、14.6%が「重点において取り組んでいることを理解する」を挙げている。このことから育てたい力の共通理解や重点において取り組んでいることを理解し合うことが重視されていることがわかる。

また、交流の回数によって交流の必要性は違ってくるのだろうか。図 2-34 で交流の回数別交流の必要性を見た。

図 2-34 交流の回数別交流の必要性



- 必要だと思う
- どちらかといえば必要だと思う
- どちらかといえば必要だとは思わない
- 必要だとは思わない

連絡会議の必要性ほどではないが、交流の回数が多いほど交流を必要だと考えている者が多いことがわかる。

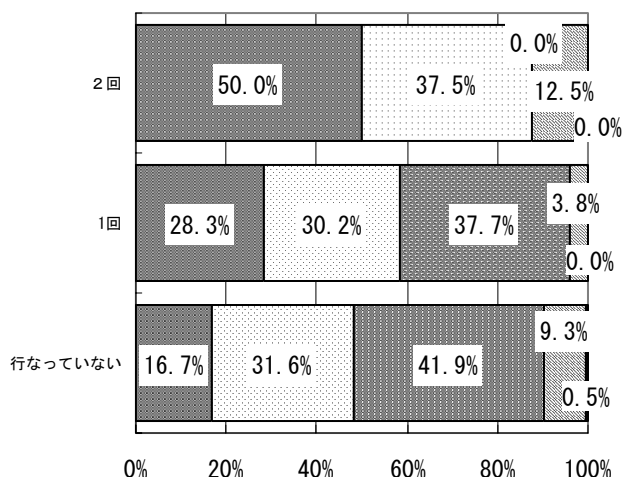
こうした調査結果を見ると、合同会議や交流を行っているところほど、子どもの情報交換をし、育てたい力を共通理解して、子どもに身につけさせたいことや育てたい力について話し合う必要性があると考えている者が、多いといえるのではないだろうか。

そしてその話し合いでは、参観経験のある者や、交流の回数が多い者が挙げていた、「入学前身につけさせたい力である、「しっかり話したり聞いたりすること」や「約束や順番や役割を守ること」などが、キーワードとなってくるのではないだろうか。

また、入学期の保護者の不安などを取り除くためにも、また小学校と就学前の教育に違いなどを保護者に知らせていくためにも、小学校入学に臨んでの保護者への説明会を保育所や幼稚園に来てもらったり、保育所や幼稚園の説明会に参加したりするなどして、合同の説明会を行うことなどが、大切になってくると考えるが、現在合同の保護者説明会を開いていたのは、9ページの図2-6で示すように全体の23.7%と少なく、また、その必要性を感じている保育士や教職員も20.3%であった。

では、合同の保護者説明会を開いているところと開いていないところでは、どのような意識の違いがあるのだろうか。図2-35 合同の説明会の回数別合同の説明会の必要性を見てみたい。

図 2-35 合同説明会の回数別合同説明会の必要性



- 必要だと思う
- どちらかといえば必要だと思う
- どちらかといえば必要だとは思わない
- 必要だとは思わない
- 無答

合同の保護者説明会を行っていないところでは、合同の保護者説明会を「必要だと思う」を選択しているところは、16.7%に過ぎないが、合同の保護者説明会を行っているところでは、その必要性は増加している。合同の保護者説明会を2回実施しているところでは、50.0%もが合同の保護者説明会を「必要だと思う」と考えている。「どちらかといえば必要だと思う」を入れると87.5%が必要であると考えていることがわかる。

やはり、連携し合同で保護者への取組をすすめているところでは、保育所や幼稚園に来てもらったり、保育所や幼稚園の説明会に参加したりするなどして、連携して保護者の不安に伝えていくことが重要だと考えていることがわかる。

こうして見ていくと、まずはお互いが参観することである。そして交流したり、合同会議をもったりする中で、お互いの保育方針や教育方針を理解し合い、育てたい子ども像を共通理解して、身につけさせたいことなどを明確にし、合同の保護者説明会を通して、保護者への共通の働きかけをしていくことである。

京都が大切にしてきた一人ひとりの子どもを大切にすること。その伝統を守り、豊かな育ちをはぐくみ豊かな学びへとつなげていくために、わたしたちは、保育所・幼稚園・小学校という垣根を越えて連携し、共に取り組んでいくことが大切だと考える。

第3章 フィールド調査を通して

第1節 保育所の1日

京都市営聚楽保育所・壬生保育所の協力を得て、就学前の保育の実際を体験させてもらった。7月に3日間ずつ、主に保育所の一日の流れを知ることがを目的に実習に入った。

(1) 聚楽保育所の1日

写真3-1 早朝保育



7:00 早朝保育の子どもたちは、保護者と一緒に登所する。(写真3-1)毎日同じ先生が迎えに出られるので、家庭での様子をくわしく連絡したり、今日の子

どもの健康状態を連絡したりして、保護者の方も安心して出かけられる。子どもたちは、それぞれの保護者との間で決めている、心のつながりを大切にしたい体全体を使った「いってらっしゃい」の挨拶をたっぷりとしてから、大きい子や小さな子が一緒にブロックで遊んだり、絵本を読んでもらったりして過ごしていた。

9:00 みんなそろっての朝のあいさつである。「おはよう」の歌を元気に歌った。少し眠そうな目をしていた子も、歌ったり体を動かしたりしているうちに瞳が輝きだした。

そろっての挨拶の後は、表現活動だった。(写真3-2)体全体を使って子どもたちは、エビになったりトンボになったり、言葉以外での表現を楽しんでいた。友達の表現の様子を見合ったり、真似し合ったりしながら楽しんでいる。ワニ歩きでは、足の親指をしっかりと床につけ、力を入れて進んでいた。

大きな子が小さな子と二人組みになり「なべなべそこぬけ」をしている。二人が心を一つにしないとうまくかわることができない。大きな子は小

写真3-2 表現あそび



さな子をしっかりと見つめながら「いくよ。いいかい」と声をかけ、くるりとかわっていた。二人でできにくい子どもたちには、先生と一緒に手をもって応援する。次は、みんな一緒に貨物列車の遊びだ。年長児が年少児を連れて出発だ。みんな長い列車になった。列車が離れないようにして行く。長い列車を作るのにみんな一所懸命だった。最後のじゃんけんにみんなが注目した。勝った子は大喜びだった。長い長い列車ができてみんなニコニコ顔だった。

10:30 今日は楽しいプールのある日だ。自分で水着に着替えて、上がった時の用意もし、いよいよ楽しいプールの時間だ。みんな並んで輪くぐりに挑戦した。身体や情緒に障がいのある子どもも、浮き輪をはずして挑戦した。二人が少し前の人と間隔をあけて並んでいると「間をつめないのだったらぬかすよ」とまわりの子どもたちが、声をかけて間をつめるように促し、順番をしっかりと守って挑戦していた。自由な時間には、先生の背中に乗り、プールの散歩を楽しんだ。その後みんな洗濯機をして遊んだ。障がいのある二人はみんなより少し早めに上がり、ゆっくりと時間をかけて、先生の見守りや支援の中で、できる限り自分で着替えをした。

12:00 楽しい給食の時間だ。好き嫌いせずいろいろな味を楽しんで食べていた。食事の量もそれぞれの体調に合わせて自分で決める。お箸も上手に使っていた。器を持って姿勢を正してみんなと食べる給食はとてもおいしそうだ。魚も上手に食べていた。班で、家庭での出来事や、ぶどうの集い(年長児の夜の集い)の楽しかったことを話しながら、しっかりと噛んで食べていた。

給食後は読み聞かせの時間である。今日は少し長い『エルマーの冒険』だった。みんなの大好きなお話のようだ。挿絵の地図を見たりして子どもたちの想像はぐんぐん広がっているようだった。

13:00 お昼寝の時間。子どもたちは、自分でタオルケットのシーツを敷いて寝る準備をした。友だちがそっと手を貸している姿も見られた。子どもそれぞれによるが、朝早くから遅くまで保育所で過ごす子どもたちには、この午睡の時間は、大切な時間だ。なかなか寝つけない子もいた。その子は先生に、背中をトントンしてもらったり、さすってもらったりしてねむりについた。就学に備えて昼寝は12月に終わるようである。

14:50 起床である。すぐに目覚める子どもたちもいれば、起こしてもなかなか目が覚めない子や、しばらく布団の上で夢の続きでも見ているの

か、ぼんやりしている子など、様々な子どもたちがいた。その時先生は、子どもたちに優しく話しかけたりからだをさすったりして、目が覚めるように働きかけ、夜早く寝ることなどを子どもたちに話されていた。

15:00 着替えをして、楽しみなおやつの時間だ。テーブルの準備をしたり、椅子を準備したりみんな待ち遠しいようだ。後から来る子に声をかける子もいた。今日は蒸しパンと牛乳だった。牛乳の苦手な子は、量を少し減らしてもらって飲んでいて。終わった子から、片付けをして帰る用意をしていた。用意ができたらブロックをしたり、絵本を読んだりするなど好きなことをして遊んでいた。

15:30 おやつの片付けがみんな済み、今日はそろって絵を描いた。好きな色のコンテを使って

丸を描いて指を使って伸ばした。その中に自分の好きなものを書いていった。まるでシャボン玉の中に入って、空を旅しているような絵が出来上がっていた。

16:00 描きたいものが描けた子から、外に出て自分の好きな遊びをしていた。セミとり・ままごと・水遊び、竹馬など好きな遊びにチャレンジしていた。セミとりに夢中になっている子がたくさんいた。園庭の桜の木にとまっているセミを網を持ってきて捕まえるのである。下の方に止まっているセミは何とか捕まえられるのだが、一度失敗するとセミは上の方へ行って子どもたちの手には負えない。子どもたちは、私に助けを求めて来た。「あそこにいるセミとって」「この台を使ったらいいのどこがうか」と台を持ってきた。台のってセミをめがけて「えいっ」と挑戦したのだが、

表3-1 保育所のある1日

聚楽保育所		壬生保育所	
7:00	順次登所, 受入れ	7:30	順次登所, 受入れ
	戸外遊びまたは室内遊び (合同保育)		戸外遊びまたは室内遊び (合同保育)
10:00	保育カリキュラムに沿って, 年齢クラスでの遊び	10:00	異年齢との交流やクラス遊びを中心とした保育カリキュラムに基づいた遊び
11:45	給食準備	11:45	給食準備
12:00	給食 各保育室で食べる 食後 お話タイム	12:00	給食 ランチルームで食べる 食後 お話劇場
12:50	午睡準備	12:50	午睡準備
13:00	午睡	13:00	午睡
14:50	起床	14:50	起床
15:00	おやつ準備	15:00	おやつ準備
15:15	おやつ	15:15	おやつ
15:30	歯磨き後身辺整理	15:30	歯磨き後身辺整理
16:00	戸外遊びまたは室内遊び (合同保育)	15:40	サークルタイム お話の会・うたなど
17:00	順次降所	16:00	戸外遊びまたは室内遊び (合同保育)
18:00	延長保育	17:00	順次降所
	おやつ 室内遊び	18:00	保育終了
19:00	順次降所 保育終了		

1度目はあっけなく失敗に終わり、子どもたちに教えてもらいながら場所を変えて、今度は木に半分よじ登り挑戦した。何とか網の中に入ったのだが、私はセミをつかむことは苦手です。どうしようかと思っていると、得意な子が羽の上からそっと手に包み込むようにして飼育ケースの中に入れてくれた。帰りにはそのセミたちは、みんな逃がしてあげていたようだった。

ある子どもには、お気に入りの場所があった。それは京都バスに見える園庭のすみっこだ。「お母さんとバスに乗って行ったの」と家庭から出かけた時の話を楽しそうにしてくれた。バスにすごく興味があるのだなと思った。しばらく一人の時間を過ごした後、またみんなと楽しそうに園庭で遊び始めた。

17:00 全員そろってホールへ移動した。幼児クラスみんなでの合同保育だ。折り紙をするグループやブロックをする子どもたち、また絵本を読んだり読んでもらったりと、それぞれがしたい遊びをしていた。保護者の方が迎えに来られた子どもたちから、帰宅である。先生方は、保護者の方と今日の保育の様子や明日の連絡をそれぞれに丁寧にされていた。

18:00 延長保育の子どもたちは、部屋を移動した。ここで簡単なおやつを食べた。今日はトマトとお茶であった。夕食までに時間のある子どもたちには、大変大切な時間だと思った。おやつが終ると幼児クラスの子どもたちは別の部屋で遊びながらお迎えを待った。

19:00 最後に残っていた子どもの、保護者の方が迎えに来られる。子どもは走って行き飛びついていた。先生が子どもの今日の様子を伝えられていた。短い時間だが大切なひと時だと感じた。

(2) 壬生保育所の1日

7:30 登所した子どもたちから、鞆やタオルを決められたところに準備して、園庭に出て遊んでいた。園庭の花に水やりをする子・朝から採ったセミを図鑑で調べる子・砂場の近くでさらさらの粉を集める子・花びらや砂を使って色水遊びをする子など、それぞれが自分のしたい遊びに夢中だった。

一人またひとりと仲間が増えていき、先生と一緒に竹馬に挑戦する子どももいた。うんていの所に竹を立てかけ、最初の一步を思い切って踏み出していた。先生に支えてもらって一步一步練習している子もいた。どの子どもも、毎日短い時間もよいので、一度は竹馬に挑戦しているというこ

とだった。

37度を超える暑さの中でも子どもたちは、とても元気に体全体を使って遊んでいた。

10:00 子どもたちが待っていたプールになった。自分のロッカーの所に行き、水着を出して着替え始めた。着ていたものを床において、簡単にたたんで鞆に入れてから、水着を出して着るのだが、汗をかいていることもあり、なかなか水着が着にくい子や後ろの紐が結べない子もいた。先生や友だちに手伝ってもらい、プールから上がった時のバスタオルを用意してやっと準備ができた。

この保育所では、写真3-3のようにプールへ入るための準備運動を楽しい曲に合わせてダンスでされていた。曲が鳴り始めただけで子どもたちはわくわく体を動かし始める。何人かの子どもたちが前に出て、みんなをリードし踊り始めた。先生

写真3-3 リズムにあわせて



の見本を見て片足バランスにも挑戦だ。足の親指に力を入れて頑張っ

て踏ん張っていた。プールでは基石拾いゲームに挑戦した。もぐ

って拾える子もいれば、顔を上げて腕を懸命に伸ばしている子もいた。また足を使って見つけている子もいた。気温が37度を越える中水温も高く、まるでプールの中は温泉のようだったが、みんな基石拾いゲームに夢中だった。足をけがして入れない子もとても入りたそうであったが、先生の話聞いてぐっところえて、みんなの基石を用意したり先生の手助けをして頑張れた。

12:00 ランチルームでの給食。部屋の前には今日の献立が掲示されている。子どもたちは先生に献立を読んでもらいながら部屋に入り、大きなテーブルに座っていただきますをしていた。大きな子が小さな子のテーブルと一緒に食べたりもしている。「おいしいね」友だちの声にみんな楽しく食べていた。みんな食欲旺盛でどんどんおかわりに来ていた。

12:50 今日のお昼寝前の話は、「白波五人男」に挑戦だった。身振り手振りをつけて声に出して表現するのである。楽しい模倣遊びの中で言葉を声に出すという体験をするのである。一人ひとり違った表現だが、生き生きと楽しんで表現し合っていた。友達の表現をじっと見つめる瞳が輝いて

いた。お互いの顔の表情を見て思わず笑みがこぼれた。体全体を使った表現であった。

15:30 写真3-4は、お昼寝後のサークルタイムの時間である、みんなで歌を歌ったり、お話をしたりする。今日は好きな食べ物の話だ。「あっ僕も一緒だ」と自分と同じ食べ物好きな友だちを見つけたり、先生の話の聞いたりと、楽しいひと時だ。「あのね○○なの」「そうなのか」友だちの話にうなずきながら、しっかりと聞いていた。みんなの前で話すことは少しドキドキするけれど、子どもたちにはとても楽しいひと時のようである。いつもとは違った友達的一面を見つけられる、そんなひと時なのだなと感じた。

写真3-4 サークルタイム



サークルタイムの後は、外遊びをしたり部屋でカードゲームをしたり、ままごとをしたり自分がしたい遊びをしたりする。ある子がカードゲームを先生と一緒にしていた。その子は言葉で自分の気持ちを表現するのが苦手な子で、友だちともトラブルを起こしやすい子であった。カードゲームをしても自分が勝つようにルールを少し変えたりするところがあった。先生はその子と夢中になって遊ぶ中で、ルールを守ることの大切さに気づいてほしいと思われた。真剣勝負の始まりだ。彼にルールを守って遊ぶことの楽しさに触れてほしいと考えられ、途中ずるいことをしようとした時、「そんなことをしたらもうしないよ」と注意しながら遊ばれた。すると、横で見ていた友だちにゲームの仕方を教え始めた。その子は友達に勝たせてあげたりしながらゆっくりとゲームをして、やり方を教え、そして最後には、自分が勝っていた。

16:50 迎えが来られるまでの間、子どもたちは、ホールにある本のコーナーで絵本を見たり、読んでもらったりしながら迎えを待っていた。保護者の方が来られて、保護者の方と一緒に本の続きを読んでいる子もいた。

2つの保育所の1日の流れを21ページの表3-1のようにまとめてみた。登所時刻や降所時刻に変わりはあるものの、1日の流れ全体には大きな違いはなかった。合同保育やクラス中心の保育の時間など、様々な形態をとりながら、子どもたちの興味関心を中心とした保育がすすめられていた。

長い時間を過ごす子どもたちには、ゆったりと安心して過ごせるように、延長保育時に同じ保育士の方があたられる等の工夫もされ、一人ひとりを大切にされた保育がなされていると感じた。また、子どもたちの大好きな遊びを通して、決まりやルールを守ることも指導されていた。サークルタイムやお話の時間などでは、話すことや聞くことに力を入れた指導がなされていた。また体全体を使った表現活動なども充実していた。

第2節 保育所と幼稚園の1週間

9月、京都市営改進黨保育所と京都市立竹田幼稚園に協力をお願いして、保育所と幼稚園の違いや保育の実験を体験することを目的に実習に入らせてもらった。保育所幼稚園共に月・火・水・金とほぼ1週間ずつ実習した。

(1) 改進黨保育所の1週間

基本的な毎日の生活は、聚楽保育所や壬生保育所と同じであった。早朝保育の子どもたちは、教室でカレンダーを見て、出席のシールを自分で帳面に貼っていた。荷物を保護者と一緒にロッカーに入れて、幼児組の合同保育の部屋に移動した。担当の保育士と保護者は、連絡や今日一日の確認をしてから仕事に出かけられる。子どもたちは、折り紙をしたり、ままごとをしたり、塗り絵をしたり、あやとりをしたり、本を読んだり、幼児組がみんな一つの部屋で好きなことをして過ごす。

職員の打ち合わせも終わり、子どもたちは戸外遊びへと出かけていった。縄跳びをしたり、鉄棒をしたり、のぼり棒に挑戦したり、竹馬に挑戦したり、花壇を掘り返して幼虫を探したり、小さい子は三輪車に乗ったりと、自分のしたい遊びに夢中になっている。長縄遊びをしていた子どもたちと一緒に遊んだ。一人ひとり跳ぶタイミングや入る方向が違うのだが、担任の先生は一人ひとりの特徴をよく知っておられて、縄を回すタイミングを少しずつ変えて対応されていた。

チャイムが鳴るわけではないのだが、先生が何人かの子どもたちに、休憩をしてからホールに行くことを伝えられると、子どもたちは上手に伝え合い、部屋へ向かった。先生が大きな声で指示されることは、なかった。

月曜日 特徴的だったのは、年長組はホールでかけふみのリズム遊びをしたことである。三人一組になり曲に合わせて歩いた。一人目が自分の好きなコースで移動して、気に入ったポーズで止まった。二人目は一人目の子どもが止まっている場

所まで進んで行き、一人目の子どもの真似をして止まる。三人目の子どもも同じように二人目の子どもの後に続くといったルールである。次は先頭を交代してはじめ二人目だった子どもが最初にスタートする。これを何回か曲に合わせてくり返すのである。子どもたちは違うグループの様子を見ながら動作を考え、楽しそうに表現していた。まねをしたり、違う表現を考えたりとても楽しそうであった。一人ひとり違う、個性豊かな表現がされていた。次に来る子に優しく微笑んでいる姿が印象的だった。

給食は、グループごとに当番が決まっていた配膳をする。器を両手で持ってこぼさないように配膳に行くのである。子どもたちはこの当番をとっても楽しみにしている。台ふきなども自分でふきを絞り上手にしていた。配膳が終わると、当番の子どもたちは、みんなの前に立ち、献立を紹介し、そろっているかなを確認し、「いただきます」の挨拶をする。元気よくみんなに聞こえる声で、はっきりと話すことができていた。

午睡の時間になった。朝の起床時刻が遅かったためになかなか寝つけない子や、何か気になることがあるのか寝つきにくい子もいるのだが、年長組は、自分で静かにして眠ることを目標にされていた。みんな約束を守って、寝つきにくくても静かに目をとじて体を休めていた。

午睡後のおやつ後は、竹馬に挑戦していた。コースを自分たちで作って楽しんでいる子どもたちや、まだ自分で進むことができずに、まずは一人で立つことを目標に挑戦している子どもなど、様々であった。それぞれの課題に応じて挑戦していくことができる工夫した場作りがされていた。倉庫の壁を使って前に一步出る挑戦の場、タイヤを使ってスタートをスムーズにする場、間隔を小刻みにしたり大きくしたりしたコース、先生に持ってもらうコースなど、自分に合ったコースを選び、みんな一所懸命挑戦していた。

火曜日 今日みんな和太鼓に挑戦。(写真3-5) みんなで和太鼓代わりになる木箱を用意した。バチはラップの芯である。おいてもらった木箱の後ろに二人一組前後に並び先生の

写真 3-5 和太鼓で遊ぼう



見本を見ながら、「トン・トーン・トン」と心をつなげてたたいていくのである。前の子が箱をたたいている時は、後ろの子どもも一緒に手を上げてたたき真似をする。先生が大きな掛け声をかけながら、大きく手を上げてバチを上の方に上げ、思い切り振り下ろす。その様子を見ながら、子どもたちも同じようにバチを大きく振り上げて木箱を思い切りたたいていくのである。汗をかき一所懸命だ。たたきにくいリズムは、声を出しみんなで言いながら何度も繰り返した。どの子どもも楽しそうに何度も挑戦していた。音を聞いて年下の子どもたちも、見に来ていた。「来年はぼくもするのだ」と思っているようだった。障がいのある子どもも、みんな一所懸命練習しているのを見ながら体を動かし、体全体で和太鼓のリズムを感じているようだった。

水曜日 ふじ組に転入児があった。初めて保育所に来た日に、何か心に残ることがあればよいなと見ていたのだが、子どもたちは、その日担任の先生とも一緒に大きな大きな山を作り始めた。クラスの子どもたちだけでなく、となりのクラスや年中児も一緒にしていた。シャベルをもってきて砂を積み上げる子、その側面を固めるためにたたいていく子、網のようなもので模様をつけようとする子、みんな少しでも高くしてでっかい山を作ろうと懸命であった。上の方ばかり砂を積み上げてもうまくいかないと感じた子が、山の麓の方に砂を置き始め裾野が広く大きな山が出来上がった。初めての友達と大きな山が作れた転入児は、とても嬉しそうな表情をしていた。自分たちよりも大きい山ができてみんな大満足の様子であった。

避難訓練があった。外遊びをしていたので、放送を聴いての避難となった。その場で放送を聞き体を低くし、担任の先生の指示で園庭の片隅に集合する。先生の指示をよく聞いて静かにすばやい避難ができていた。日ごろから先生との関係がきちんと築けているからだなと感じた。

今日は、おはよう集会の日なので、急いで手や足を洗いホールへ行った。先生によるカボチャのスタンプがあったのだが、部屋を暗くしてあったことに驚いたのか、そのカボチャに驚いたのか、ある一人の子が泣き出したので残念ながら、カボチャのスタンプはすぐに終わった。

その後は子どもたちの読書の表彰だ。図書係りの先生から、読書カードをもとに読んだ冊数を記したかわいい賞状をもらいとても嬉しそうだ。賞にもステップがあり少しでも子どもたちが本を読むことに意欲をもてるように工夫されていた。

午睡の後、おやつを食べフルーツバスケットをして遊んだ。ルールを教えてもらった後、いよいよゲームの始まりだ。先生の話をよく聞いて、ゆっくりとゲームが進んで行く。転入してきた友達とも仲良く楽しむことができていた。楽しい遊びの中でルールを守ることの大切さなどを学んでいるのだ。

金曜日 朝から子どもたちは、自分たちがしたい外遊びに夢中であった。今日も竹馬に挑戦している子どもたちがたくさんいた。(写真3-6)何とか自分の力で一步を踏み出そうと一所懸命だ。友達の挑戦している姿をよく見てアドバイスをしたり、友達のアドバイスを聞いて何度も挑戦したりして仲良く楽しく挑戦している。先生たちによる挑戦しやすい場作りが活かされ、子どもたちが、先生のアドバイスを聞いたり、友達の薦めに耳を傾けたりしながら自分の目標に挑戦している姿が素晴らしいと思った。竹馬だけでなく鉄棒やのぼり棒にも挑戦している子どもがいる。小さな子どもたちは、三輪車などにも挑戦している。みんなで励まし合いながら、自分の目標に向かって挑戦する体験ができることは大切なことだと思った。

写真3-6 竹馬あそび



その後、みんなで鉄棒の挑戦をホールでした。自分のしたいまわりかたや、ぶら下がり方や降り方に一人ずつ挑戦するのである。先生に鉄棒を持つ手をそっと支えてもらったり励ましてもらったりしながら楽しく挑戦していた。苦手な回り方に頑張って挑戦する子どもたちもたくさんいた。

午睡の後にはホールで音楽に合わせてリズムダンスや三人一組のかげふみのリズムの表現活動を楽しんだ。音楽に合わせて動くのがみんな大好きで、迎えが来られても「待ってて」と頼んでみんななどの遊びに夢中の子どももいた。

特例保育の子どもたちは、みんなで過ごす部屋で、あやとりや折り紙・お絵かきをしたり、絵本を読んだり、それぞれが好きなことをして過ごして迎えを待っていた。折り紙の本を見ながらカブトムシを折るのに挑戦する子や、広告の紙を利用してベルトや剣を作る子など、様々であった。本を見ながら一所懸命に折り方を尋ねてくるのには感心した。

このフィールドワークを通して、まず感じたことは、一人ひとりの興味や関心を大切にしながらも、みんなで挑戦するという雰囲気が大切にされているということである。一人ひとりとは違ったことに挑戦していたりするのだが、子どもたちが、お互いを励まし合いながら、挑戦する姿が素晴らしいと感じた。また集団で同じことに挑戦したり集団で遊んだりということも取り入れられており、群れ遊びや野外での遊びの経験が少なくなっている子どもたちにとっては、大変貴重で大切な体験であると思った。また驚いたことは、先生の大きな声がしないということである。次々と様々な活動をしていくのであるが、先生が大きな声を出されなくても、指示がしっかりと伝わり活動できていた。

(2) 竹田幼稚園の1週間

月曜日 登園した子どもたちは、教室で出席の帳面を先生に渡した後、それぞれがしたい遊びをし始めた。ボールがたくさん用意されていて、ボールを使って高く投げて遊び始めた子どもたちが何人かいた。先生が「ホールでしょう」と促され、その子たちはホールへ移動した。園庭の遊具のところに遊びに行った子どもたちもいた。

ボールで遊んでいる子どもたちは、高く投げて遊ぶ子ども、ボールつきをする子どもなど様々であった。そのうちにボールを高く投げた後に手をたたき、またボールをキャッチするという遊びを始めた。「二回たたけた」「僕は三回たたけた」手をたたく回数を競い合う子。高く投げている間にくるりと一回転してキャッチする子。どんどんと自分たちで遊びを工夫していた。ゴールを作ってボールを転がし、自分たちでルールを決めてゲームを始める子もいた。

ホールから教室へ戻ると、教室の片隅では運動会の看板作りがされていた。絵の具を使って筆で一人が一文字ずつ書いた。先生に字を教えてもらいながら書いている子もいたが、よく知っている子が多いなと感心した。

教室の外の廊下では、色水遊びをしていた。園庭にある実や花びらを使って、プリンなどの空き容器を使い色水をつくっていた。後から来た子が置いてあった容器を使い始めると、先に使っていた子が、「ここは僕が使っているところや。やめなな」と言うのだが、聞き入れない。どうするのかなと見ていると、「取ってきてあげるし」といって新しい容器を取ってきて渡していた。後から来た子が、「もう実がない」といって困っていると、今

度は他の子が「これ入れてあげるわ」と自分の作っていた色水を分けていた。もめごとがあっても、みんなで解決し合って工夫して遊んでいた。

発育測定の日なので子どもたちは、図書室で養護教諭に挨拶をした後、順番に測定してもらった。脱いだ服を自分でたたみ、自分のかごに入れていた。脱いだ時に裏返しになってうまく返せない子がいたが、友だちに励まされながら、自分の力で、しっかりと着替えを済ませていた。早く終わった子どもたちは、好きな本を読んだり見たりして過ごした。友達と一緒に本を読んでいる子もいた。夏休み明けの短縮期間で、弁当もなく午前中保育であったので、測定が終わったら降園の時間であった。

火曜日 この日は、竹田小学校との合同避難訓練が行われた。地震の後に火災発生ということで、竹田小学校に避難するというのであった。

写真 3-7 合同避難訓練



子どもたちは、登園してくると避難訓練があることを先生から聞いた後、昨日と同じようにそれぞれが好きな遊びをホールや園庭や教室で始めていた。10:10分に園長先生の地震発生の放送が入った。私は、ホールで子どもたちとボールで遊んでいたのであるが、子どもたちは、慌てたり、騒いだりすることもなく整然とベランダから滑り台を使って園庭へと降り、小学校の校庭へと避難できた。2階の最終は、養護教諭が確認されていた。小学校の校庭に集合した後、担任の先生が人数の確認をされた。その後全体で竹田小学校の校長先生や安全主任の先生からの話、そして消防署の方の話なども、しっかりと聞くことができた。(写真 3-7)

消防自動車が来ることになっていたのですが、消防自動車の絵を描くことが予定されていた。一度園に帰り、画板と画用紙とクレパスを持って、もう一度小学校の校庭に行った。子どもたちは、大きなタイヤに触れたり、描きたいところをくわしく見に行ったりしながら、よく見て消防自動車を描いていた。集中を切らさずに最後までじっくり見て描こうと頑張っている子がいた。自分の感じた部分部分は描けるのだが、全体がつなげにくいようであった。しかし時間ぎりぎりまで一所懸命に自分の感じた消防自動車を丁寧に描いていた。このように苦手なことでも最後までコツコツと取り

組む姿勢がすばらしいと感じた。今日も昼までの日なので、戻るとすぐに降園準備であった。明日が園外保育になるので、先生は迎えに来られた保護者の方と明日の参加の確認や迎えの確認をされていた。

水曜日 京都市民防災センターへの園外保育である。地下鉄竹田駅に集まって出かけた。親子での行事であるため、子どもたちは保護者と一緒に集まってきた。小さな兄弟を二人も連れて参加されている方もおられた。保護者と一緒ではあるが、子ども同士で歩いている子もいれば、保護者と共に歩いている子もいて、様々であった。防災センターでは、案内に沿って体験をしていくのであるが、子どもによっていろいろな様子が見られた。暴風体験といって風の強さを体験したりするのであるが、どうしても怖いといってなかなか体験することができなかった子がいたが、いくつかの体験のブースをまわり、最後の煙体験では、「一緒に行こう」と友だちや他の保護者の方も誘ってくださり、体験することができた。子どもたちは、避難訓練の後に実際に防災センターで地震の揺れを体験したりして、より防災に対する意識などが、高まったと感じた。

帰りは、防災センターでの解散となった。帰る道すがら、小さな兄弟を連れた保護者の方が、先生に子育てについて相談されていた。一人で三人や四人の子育てをしている保護者の方がおられると聞き、子育て支援の充実などが、大変重要になってくると感じた。

金曜日 高瀬川の堤防へ虫取りに出かけた。登園してすぐに、ポケット図鑑や虫取り網や飼育ケースを持って玄関に集まった。年中組と二人一組になって出かける用意をした。年少組が、絵本を持って「この虫を探してきてね」と頼みにきていた。(写真 3-8) 子どもたちは、絵本を見ながら、「まかせといてね」と頼もしい返事をしていた。高瀬川の堤まできたら、子どもたちは、虫を追い自分で捕まえようと夢中になっていた。虫取り網は、バッタを捕まえるのには、少し長すぎたようで、とんだバッタをよく見て、手で

写真 3-8 虫採り出発



らったりして、
 やっと自分で
 捕まえた時には、「やったー。
 つかまえた」
 とうれしそう
 に見せに来て
 くれた。また
 草むらにはえ
 ている金色の
 エノコログサ

写真3-9 草相撲



に似た植物で花束を作って見せてくれる子もいた。
 先生に教えてもらって草相撲をしている子どもたちもいた。(写真3-9) 帰りには、にわか雨にあって、雨宿りするというハプニングもあったが、自

然の中へ出かけて行き、自然を体感することの大切さを感じた。帰ってくると早速図鑑を広げて虫の名前を探している子どもたちがいた。また苦手だけれど触ってみたいと恐る恐る虫に触れようとする子もいるなど様々であった。

短縮中で弁当がなく午前中であったが、普段は月・火・木・金曜日が弁当の日で降園は、14:00ということであった。また、火・金は特別保育で希望者は、15:00までということであった。

この週の木曜日には、午後到他園で研究保育があるということで、先生方と一緒に参加させてもらった。

そこでは、帽子取りというゲームを通しての保育の研究会であった。クラスみんなで1つの遊びを通して、子どもたちがどのように活動するかを

表3-2 保育所・幼稚園の1週間

改進黨育所		8月30日~9月3日			
日	30日(月)	31日(火)	1日(水)	2日(木)	3日(金)
行事			月はじめの集会 避難訓練		
活動	自分の好きな体を動かす遊びをする 長縄跳び・のぼり棒・竹馬・鉄棒・鬼ごっこなど 表現遊び(リズムに合わせて) 竹馬などの戸外遊び	自分の好きな体を動かす遊びをする 長縄跳び・のぼり棒・竹馬・鉄棒・鬼ごっこなど 和太鼓をたたこう 竹馬などの戸外遊び	自分の好きな体を動かす遊びをする 長縄跳び・のぼり棒・竹馬・鉄棒・鬼ごっこなど 避難訓練 砂山づくり おはよう集会(読書の表彰) 造形活動(ぬりひろげを楽しむ)	室内で自分の好きな遊びをする いすとりゲーム	自分の好きな体を動かす遊びをする 長縄跳び・のぼり棒・竹馬・鉄棒・鬼ごっこなど 鉄棒に挑戦 竹馬などの戸外遊び

竹田幼稚園 9月6日~9月10日

日	6日(月)	7日(火)	8日(水)	9日(木)	10日(金)
行事	発育測定	防災訓練(竹田小学校との合同訓練)	園外保育・家庭教育学級		虫取り
活動	友達と一緒にボールを使っていろいろな遊び方を考えて試したり挑戦したりする 発育測定を受ける 運動会の看板の文字を書く	友達と一緒にボールを使っていろいろな遊び方を考えて試したり挑戦したりする 合同防災訓練に参加する 消防自動車を見たり触れたりして、パスで絵を描く	京都市民防災センターに行く	秋の自然に触れて遊ぶ 消防自動車を描く 運動会の歌や幼稚園の歌を歌う 体操やフォークダンスをする	虫取り遠足に出かける

観察しての研究会で、話し合いの中で先生方が一人ひとりをよく観察されているのに驚いた。小学校の体育学習につながる遊びだと感じた。また、みんなで一つの遊びをする中で、決まりを守ったり、お互いの気持ちを思いやったりできるすばらしい取組だと感じた。

このフィールドワークを通して感じたことは、子どもたちのこれやってみようという関心を大切に、活動が計画されているということである。一人ひとりの興味関心に、対応できるように準備がされていた。園外に出かけて、自然を体感する活動などが計画されていて、短い時間の中で、次々と子どもたちの興味に沿った活動がすすめられていくのに感心した。みんなで取り組んだ、消防自動車を見て描くという活動も、同じ目標に向かって取り組むという大切な経験だと思った。ただ実習に入らせてもらったのが、短縮期間中ということもあり、お弁当の時間や午後の保育の様子を知ることが出来なかったことが、残念であった。

前ページ表3-2でまとめたように、保育所と幼稚園という2つの組織の中で、4日間という短い経験であったが、それぞれに、一人ひとりの思いを大切にされた保育・教育が展開されていた。「幼児は、身体感覚を伴う多様な活動を体験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探求心を培い、また、小学校以降における教科の内容等にも実感を持って深く理解できることにつながる『学びの芽生えを』はぐくんでいる」(20)と中央教育審議会の中間報告にもあるように、それぞれが関心をもった活動を体全体を使って、体感することや、表現をすることを大切にされた保育・教育がなされていた。そのために子どもたちの興味に合わせて遊びが展開するように、様々な場の設定や、用具の準備などの環境も整えられていた。

保育時間の長い短いがあったが、その保育内容については、大きな違いがあるとは思わなかった。いわゆる自由保育ということで、子どもたちそれぞれが、自分の興味をもったことを追究ばかりしているのではないかと考えていたが、大きな思い違いであった。保育所・幼稚園共に集団で1つの目標に向かって、みんなで取り組むなどの活動も取り入れられ、子どもたちの興味関心を大切にされたカリキュラムに沿った保育がなされていた。

保育所においては、自分の興味あることに十分取り組ませて、満足感や充実感をもたせ、そのことを認めることで、みんなで新たな遊びにめあてをもって取り組んでいけるようにされていたの

が、印象的であった。お互いに励まし合い、目標に向けて頑張る姿がすばらしかった。また、幼稚園では、小学校との合同の避難訓練などに取り組み、連携にむけて少しずつ取組が進んでいると感じた。

(20)中央教育審議会『子どもを取巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について』(中間まとめ)p.3

第4章 子どもたちの豊かな育ちを支えるために

第1節 就学前と学校を比べて

(1) 就学前の1日と学校の1日

ここまでは、就学前教育の現状を見てきたが、ここでは、就学前の生活と小学校の生活では、どのようなところに違いがあるのかを比較し考えてみたい。

まずは、表4-1で小学校と就学前の1日の流れを比較してみる。1点目として最も大きな違いは、小学校は、チャイムによって1時間ごとに区切られていることだろう。最近は1校時と2校時や3校時と4校時の間の休憩を取らず2時間続きの校時表を作成しているところもあり、45分ごとに活動が区切られるということもなくなってきているようだが、基本的には小学校では、45分間を1単位時間とする授業形態である。佐々木宏子は、「大半が45分を基本単位時間とし、毎時間ねらいや目標が決められ、課題が達成できたかどうかの評価の対象となります。つまり45分の中で、何をどのように思考し、課題解決に至ったかを問われるのが、一般的に小学校の『学習』と呼ばれているものではないでしょうか」と述べている。(21)しかし就学前の生活は、チャイムに区切られることもなく、自分の興味関心に基づき1日ゆっくりと挑戦したり、日々同じようなことに繰り返し挑戦したりでき、ゆったりとした生活の流れの中で、子どもたちは、遊びを通して学んでいた。このような経験の中から、学習の基礎となる、興味関心がはぐくまれ、自らが課題を解決する力につながっていくのではないだろうか。

2点目として、小学校ではやはり、教室での机にむかっての学習が中心になってくることが挙げられるのではないだろうか。保育所や幼稚園では、学びの場は、所園全体であったり、また、自然の中である。様々な場所で、生活全体を通して、遊びを通して学んでいる。言い換えれば、体全体で学

表 4—1 小学校・幼稚園・保育所のおよその1日

	小学校		幼稚園		保育所
8 : 45 8 : 55	朝の学習 1校時	9 : 00	登園 戸外遊びや室内遊び	7 : 00 7 : 30 8 : 30	延長保育順次登所 特例保育順次登所 順次登所 戸外遊びや室内遊び
10 : 25	2校時 中間休み		カリキュラムに沿っての遊び		保育カリキュラムに沿っての遊び
10 : 45 10 : 55	チャレンジタイム 3校時	12 : 00	昼食	12 : 00	昼食
12 : 25	4校時 給食		戸外遊びや室内遊び	13 : 00	午睡
13 : 10 13 : 15 13 : 30 13 : 45 13 : 50	給食片付け 昼休み そうじ 5校時	14 : 00	降園(月・木)	14 : 50 15 : 00	起床 おやつ 戸外遊びや室内遊び
14 : 35	帰りの会 放課後		特別保育(火・金) 降園	17 : 00 18 : 00 19 : 00	順次降所 特例保育 延長保育 おやつ 延長保育終了
		15 : 00			

び、体感しているといえるのではないか。その子どもたちが、小学校に入ると、教室の中で座学が中心の一斉授業になるのでは、その環境の変化に戸惑う子ども出てくるのではないか。新保も、「旧態依然とした座学中心・チョークアンドトークの一斉授業だけでは今の子どもたちに合わなくなっている」と述べている。(22) 生活科の授業や他の教科の授業などでも、一人ひとりの課題を大切にしたい授業が組まれているが、小学校入学当初は、特に子ども自身が体験し、体感できる授業の創造等がより大切になってくるのではないかと感じた。

3点目は、自分の感じたことや考えたことを、集団の中で話したり聞いたりする体験活動についてである。保育所や幼稚園では、当番活動などの中でも、みんなの前で話すことや聞くことの経験を積みさせているところや、サークルタイムという時間を設けて、自分の感じたことや思ったことを話す機会を設けているところや、身ぶり手振りをつけながら声を出すという経験をしているところ

などがあつたが、このことは、小学校の学習につながる大変大切な経験だと感じた。

幼児は、生活の中で心を動かされるような体験をした時に、それを親しい人に言葉で伝えたいとなる。心を動かす体験には、自然の美しさや不思議さに触れた時、楽しい活動に参加した時、面白い物語を聞いた時などの感動的な体験ばかりでなく、友達と対立したり、失敗した時に悔しい思いをしたりするなどの感情的な体験もある。幼稚園教育要領解説には、「言葉で表わすことが難しい場合も多く、表情や動作などを交えて精一杯伝えていることもある。このような幼児なりの動きを交えた表現を教師が積極的に理解し、的確に言葉で表現していくことによって、幼児が表現しようとする内容をどう言葉で表現すればよいかを理解させていくことも大切になる」と記されており(23)、また、保育所保育指針にも同様な記述がある。

小学校では、毎時間の授業の中で、自分の感じたことや考えを発表したり、作品に表わしたりと

いう活動が日々行われる。その中で自分と同じ考えの友達がいることを知ったり、また違う意見に新たな発見をしたり、共に学び合う喜びを知る。子どもたちが、自分なりの言葉で表現できるようになるためには、自分なりの表現が周囲の人に伝わる喜びと満足感を味わうようにすることが大切である。その喜びや満足感を基盤にして、自分なりの言葉で表現しようとする意欲は高まるのである。集団が変わる小学校で、自分の思いを話したり聞いたりできるように、就学前でももっとこのような経験をするのが大切だと感じた。

(2) 就学前の1週間と学校の1週間

次に、小学校と就学前の1週間で、生活を中心に比較してみたい。表4-2は小学校での9月の1週間の学習予定である。小学校では、各教科の学習に、学級で一斉に一つの目標にむかって、取り組むことが多いが、保育所や幼稚園では、一人ひとりが自分の興味関心を追及することが多い様に感じた。しかし今回の実習では、子どもたちの大好きなプール遊びの中で、ルールを守ることを経験したり、クラスみんなで竹馬に挑戦したり、和太鼓に挑戦したり、消防自動車という子どもが興味をもつ題材をみんなで描くという活動をしていたり、サークルタイムを設けて、友達の意見をみんなで聞く経験などの活動がされていたりすることから、小学校の学習につながっていく大切な取組がなされていると感じた。このように、集団で共通の目標に取り組むことなどの経験の重要性を改めて感じた。

このように集団で一つの目標に向かって挑戦していくという活動などが、遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から、教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行につながると考える。

例えば、27 ページ表 3-2 就学前の表現遊びの経験などは、下記表 4-2 小学校の体育のリズム遊びや音楽の歌遊びにつながり、豊かな表現力の育成へとつながっていくと考える。また、太鼓をたたこうは、音楽へ、消防自動車を描く活動などは、図工へ、虫取りなどは、生活科へとそれぞれの教科につながる興味関心をはぐくんでいると考える。しかし、教科の学習へのつながりだけでなく、集団で一つのことに挑戦したりする中で、困難なことに挑む力や、ルールを守って取り組む力、また、人とかかわる力など、学習に挑んでいくための素地となる大切な力を身につけていると考える。

中央教育審議会においても、幼稚園や保育所において、「小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の支援の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動を『協同的な学び』として位置づけ、その取組を推奨する必要がある。」と示している。(24)

小学校において、学級全体で学習という目標に向って挑戦する時、自分だけの主張をしていては、集団の中での意見交流などはできない。ルールや約束を守り、友だちの意見に耳を傾けないと、共に学ぶ楽しさには、触れることができないと考える。この「協同的な学び」は、小学校との接続によって、大変重要になってくると考える。

表 4-2 小学校の生活

がくしゅうよていひょう

1年2組

9月6日～9月12日

日	行事	1	2	3	4	5
6日 月		こくご	さんすう	たいいく	たいいく	
		かんじでかこう かずとかんじ	20までのかず 10のまとまりをつくる	リズムにのって うたあそびをたのしもう	リズムにのって うたあそびをたのしもう	
7日 火		さんすう	こくご	せいかつ	せいかつ	こくご
		20までのかず かぞえよう	よくきいて あてよう わたしは なんでしょう	いきものだいすき いきものようすをみにいこう		かんじでかこう かずとかんじ
8日 水		どうとく	さんすう	こくご	おんがく	たいいく
		きちんとせいとん できるかなげーむ	20までのかず かぞえよう	よくきいて あてよう わたしは なんでしょう	すずめがサンバ ほうこうばればれ	かけっこ りれーあそび ばとんばすをしよう
9日 木		ずこう	ずこう	たいいく	たいいく	
		はったり つないだり つなぎかたやはりかたをくふうしよう		リズムにのって うたあそびをたのしもう	リズムにのって うたあそびをたのしもう	
10日 金		さんすう	こくご	せいかつ	せいかつ	おんがく
		20までのかず 大きさをくらべよう	よくきいて あてよう わたしは なんでしょう	いきものだいすき いきものとなかよしになろう		すずめがサンバ ほうこうばればれ

第2節 これから進める連携の充実にむけて

(1) 育てたい力の共通理解と深い子ども理解

第2章でも述べたように、京都市の保育士や教員は、全体として98.2%の者が連絡会議を必要だと考えている。このことは、現状を何とかして改善していきたいという気持ちの現れではないだろうか。自由記述欄には、その会議でお互いを知りたいということが述べられている。

・様々な幼稚園、保育所と、それぞれの就学前教育の取組に違いがある。小学校教育のねらいと子どもたちの現状を知っていただき、それぞれの立場で、子どもたちにとって重点的に取り組むべきことを、共通理解していきたい。(小学校)

・1年生の学習生活の様子をわかってもらい就学前教育の課題をもってもらうために連携を充実していけばいいと思う。また逆に就学前教育で大切にされてきたところを引き続くためにも連携の充実が大切だと思う。(小学校)

・子ども一人ひとりを大切に課題をもって生活してきたことが小学校に行っても継続していけるよう、連携をとることが必要だと思う。また、学校に行った子どもたちのその後の育ちが知りたいので、行き来しながら共に育てていけるようなことがあればと思います。(幼稚園)

・保幼小で連携をもち定期的に会議をもち地域の子どもたちのもつ課題を話し合っています。夜の会議になり大変ですが、そうした積み上げをすることで小保での子どもの姿がわかったり、小保の先生の子どもの捉え方の違いが理解できるようになり同じ課題にむかって取り組めると思います。(保育所)

・一人ひとりを大切にした取組の連携を充実させる。しっかり聞いたり話したりすることの重要性について連携する。(小学校)

・就学前教育で大切にすべきこと、達成すべきことそして、小学校教育で大切にすべきこと、達成すべきことを見直し、教育の質を向上させることがお互いの教育の連携充実につながっていくと思う。(幼稚園)

・小学校にあがってからの様子や子どもたちの弱さやどんなところにあるのか聞かせてもらえると、保育を見直すよい機会にもなり、参考になると思います。個性を大事にすることと、みんなの中で自分をコントロールしていく力をつけることをどう両立させていくかなど話し合えたらと思います。(保育所)

授業に集中できず歩き回ったり、自分の思いが通らずにパニックになっていたり、様々な様子の子どもたちを目の前にし、日々どのようにすべき

か悩み、責任をすべて自分で背負い込んで悩んでいる教師も大勢いる。この子どもたちのために、何をすべきなのか、どのような指導が適切なのか。子どもたちにとって楽しい授業となるように、日々悪戦苦闘しているのであるが、その解決の糸口は、その子どもの成育歴や保育歴を知ることであろう。

保育所や幼稚園と連絡し、一人ひとりの情報交換を密にし、支援の必要な子の把握などを事前に行っていくことで、少しでもスムーズな接続が図れるのではないだろうか。小学校1年生の担任にとっては、4月に入学する子どもたちの一人ひとりの実態を知ることが大切になってくるが、そのことについても、多くの者が述べている。

・小学校1年生の担任にとっては、4月に入学する時の子どもたちの一人ひとりの実態（特に課題面）についての情報がとても少なく不安です。幼稚園からは、指導要録（写し）が送られてきますが集団生活の中で見られる、その子どもの課題についてはほとんど触れられていませんし、保育園についてはまったくわかりません。幼稚園・保育園から小学校への細やかな連携はとても大切だと思います。(小学校)

・いろいろな取組をしてきた中、小学校で一斉に同じ活動をするのは子どもにとって捉え方は様々だと思う。もちろん子どものそれぞれの育ち（家庭における）も違う。園での様子を個別（保護者のことも含めて）にもっと聞き取りながら、小学校へとつなげていくことは、とても大切であると思う。(保育所)

・小学校、幼稚園、保育所の合同の会議をもつのは時間的にも無理があるかもしれないので、特に気になる子どもについては文書などで連携をとる方法なども考えてもよいのではないかなと思う。(保育所)

私たちは、なぜその子がそのような行動をとるのか、子どもの心を理解するためには、どのような就学前の生活をしてきたのか、その子はどのようなことが得意だったのかなど、その子のよさやその子の育ちの背景を知る必要がある。豊かな教育をすすめていくために、成育歴や家庭環境などについても理解し、より深く子どもを理解するためにこそ連携が必要なのである。

(2) まずは、お互いに出かけて体験しよう

その連携にはまず、お互いの保育や教育を知るために参観に行くことが大切だと考える。保育士や教師自身が子どもの現実を見つめ、今の子どもを知ることである。就学前の教育に問題があるとか、小学校の教育に問題があるとか、お互

いを批判している時ではない。まずお互いを知り、何が子どもたちにとって段差なのか、それぞれは、育てたい力をどのように考えているのか。参観や交流を通して話し合うことではないか。

B調査参観経験では、全体では、43.1%の経験しなかったが、B調査の「連携を充実させるために、どのような課題があると思いますか」の自由記述欄に、多くの保育士や教職員からの意見が寄せられた。その中の参観や交流についての意見を見ると、参観や交流については、保育士や教職員は、以下のように述べている。

- ・ 参観交流をし、お互いの子どもたちの様子を知ることが大切だと思う。(小学校)
- ・ 幼児や児童の交流ももちろんだが、教師間の交流も深めていく必要があると思います。お互いに授業を公開したり活動の交流をしたりしていくことがいるかなと思います。(小学校)
- ・ 幼稚園、小学校双方がそれぞれの現場を「見る」「知る」ことがまず大切であると思う。就学前に学習以外に必要なことがたくさんあること、6歳までに身につけておかなければならない事柄を双方の立場の教員がきちんと理解すること。(幼稚園)
- ・ 小保共にいろいろな行事等に参加することをきっかけにして、お互いの取組を実際に目で見るようにし、理解していくことが必要だと思う。子どもへの対応の仕方、食事等知っておくことで対応が繋がっていくのではないと思う。(保育所)

このように、どの校種の者も、「見る」「知る」ことから始めることの大切さを感じているのである。小学校入学という時期は、子どもたちにとって今まで生活してきた集団が大きく変わる時期である。自分のことを理解してくれた仲間や信頼していた保育士や教師が変わる大きな節目なのである。安心して自分の気持ちが表現できる集団があって、初めて落ち着いて学習に取り組めるのである。緊張のあまり、みんなの前では声さえ出ない子どももいる。そんな子どもたちに保育所・幼稚園・小学校が一緒になって、自分の気持ちを言葉で表したり、相手の気持ちを推し量ったりできる力の指導方法などを共に考えていくことが必要ではないだろうか。保育所・幼稚園・小学校という垣根を越えて、共に子どもに育てたい力について話し合い、取り組んでいく必要があるのではないだろうか。

一人ひとりを大切にしたい京都の教育を大切にするため、保育所・幼稚園・小学校が垣根を越えて、

実践へとつなげていかなければならない。

今回フィールド調査に入り、就学前の保育・教育を体験させてもらったことで、自分自身の取組を振り返り、考えていくのに大変貴重な体験となった。同じ校区の保育所・幼稚園・小学校の保育士や教職員が、中学生の「生き方チャレンジ」のように、まずはお互いの保育・教育を体験することだと強く感じた。

- (21) 佐々木宏子 『なめらかな幼小の連携教育 その実践とモデルカリキュラム』2004.2 p.78
- (22) 新保真紀子 前掲注(6) p.21
- (23) 文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館1999.6 p.110
- (24) 前掲 注(4) p.3

おわりに

小学校入学という時期に、一人ひとりの個性や多様性を尊重し、豊かに発達させていくためには、保育所や幼稚園と連携し、協力していかなければ多様化した子どもたちを受け止め、支援していくことはできない。

社会が変化し、そこに生きる私たち大人自身はその生活スタイルや価値観を変容させてきたことによって、子どもたちの育つ環境も大きく変化してきている。「母子カプセル」など子育ての孤立化も進んでいる。大きな変化があっても当然ではないか。にもかかわらず、私たちは、その実態を明らかにし、子どもの豊かな人間性をはぐくんでいくための指導の在り方や、連携の方法を共に考えてきたであろうか。

この調査を通して、様々な子どもたちに出会った。障がいのある子ども、特別支援が必要な子ども、また様々な課題を抱えた子ども、その子どもたちが小学校に入学する時、この就学前の様子が伝わらなければ、戸惑う子どもが出てきて、よさを理解されずに疎外されてしまうかもしれないと思った。

このたび垣根を越え快く実習をさせてくださった保育所・幼稚園では、保育士や教職員の方々は、子どもたちの豊かな育ちを大切に、日々懸命に保育・教育に取り組んでおられた。時間を見つけては、私に熱心に話しかけてくださり、一人ひとりの子どもたちの豊かな育ちを願って、互いかけ橋が必要だと話し合った。共に手を携え子どもたちの豊かな育ち・豊かな学びをめざして連携していかなければならないと強く思った時であった。そのことが、一人ひとりの子どもたちを大切することだと再認識した。

《付表》A 調査：組織に対しての現状調査項目

【問 1】：合同の会議の回数

	1回	2回～3回	4回以上	行っていない	総計
小学校	28.1%	24.7%	7.3%	39.9%	100.0%
幼稚園	6.3%	25.0%	50.0%	18.8%	100.0%
保育所	10.0%	45.0%	15.0%	30.0%	100.0%
総計	24.8%	26.6%	11.2%	37.4%	100.0%

【問 2】：会議の出席者

	管理職のみ	管理職と担任や担当者	担任や担当者	総計
小学校	13.1%	61.7%	25.2%	100.0%
幼稚園	7.7%	84.6%	7.7%	100.0%
保育所	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
総計	11.2%	67.9%	3.7%	100.0%

【問 3】：会議での重点

	子どもについての情報交換	保育方針・教育方針の共通理解	行事や取組の連絡調整	地域行事など参加・活動について	総計
小学校	67.3%	9.3%	19.6%	3.7%	100.0%
幼稚園	30.8%	38.5%	23.1%	7.7%	100.0%
保育所	92.9%	7.1%	0.0%	0.0%	100.0%
総計	66.4%	11.9%	3.7%	3.7%	100.0%

【問 4】：交流の回数

	1回	2回～3回	4回以上	行っていない	総計
小学校	24.2%	34.8%	9.6%	31.5%	100.0%
幼稚園	6.3%	43.8%	50.0%	0.0%	100.0%
保育所	10.0%	40.0%	15.0%	35.0%	100.0%
総計	21.5%	36.0%	13.1%	29.4%	100.0%

【問 5】：交流の種類選択数

	選択数 1	選択数 2	選択数 3	選択数 4	選択数 5	選択数 6	選択数 7	総計
小学校	35.2%	28.7%	20.5%	9.0%	4.1%	2.5%	0.0%	100.0%
幼稚園	6.3%	25.0%	25.0%	18.8%	6.3%	12.5%	6.3%	100.0%
保育所	15.4%	53.8%	15.4%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総計	30.5%	30.5%	20.5%	10.6%	3.3%	3.3%	0.7%	100.0%

【問 6】：合同の説明会

	1回	2回～3回	4回以上	行っていない	総計
小学校	21.9%	4.5%	0.0%	73.6%	100.0%
幼稚園	6.3%	0.0%	0.0%	93.8%	100.0%
保育所	20.0%	0.0%	0.0%	80.0%	100.0%
総計	20.6%	3.7%	0.0%	75.7%	100.0%

【問 7】：合同の説明会参加者

	管理職のみ	管理職と担任や担当者	担任や担当者	総計
小学校	19.6%	78.3%	2.2%	100.0%
幼稚園	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
保育所	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
総計	19.6%	78.4%	2.0%	100.0%

【問 8】：合同の説明会で重視していること

	小学校と就学前の共通する面と異なる面	入学に臨むでの親の自覚・心構え	連携して取り組んでいることを伝える	不安なことは相談してほしい	総計
小学校	17.4%	73.9%	0.0%	8.7%	100.0%
幼稚園	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
保育所	25.0%	50.0%	0.0%	25.0%	100.0%
総計	17.6%	70.6%	2.0%	9.8%	100.0%

《付表》B 調査：調査保育士・教職員に対しての意識調査項目

【問 1】：担当しているクラス

	混合クラス	4才児	5才児	1年生	総計
小学校	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
幼稚園	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	100.0%
保育所	22.0%	39.0%	39.0%	0.0%	100.0%
総計	4.7%	15.9%	15.9%	63.4%	100.0%

【問 2】：参観経験

	ある	ない	総計
小学校	22.9%	77.1%	100.0%
幼稚園	88.1%	11.9%	100.0%
保育所	71.2%	28.8%	100.0%
総計	43.1%	56.9%	100.0%

【問3】：入学前に身につけてほしいこと

【問4】：入学後に身につけてほしいこと

	衣服の着脱、食事や排泄の自立	文字や数字に関心をもつ	約束、順番、役割を守る	しっかりと話したり聞いたりする	無答	総計
小学校	49.7%	0.0%	23.4%	26.9%	0.0%	100.0%
幼稚園	42.9%	0.0%	4.8%	50.0%	2.4%	100.0%
保育所	39.0%	0.0%	5.1%	55.9%	0.0%	100.0%
総計	46.4%	0.0%	16.7%	36.6%	0.0%	100.0%

	衣服の着脱、食事や排泄の自立	文字や数字に関心をもつ	約束、順番、役割を守る	しっかりと話したり聞いたりする	無答	総計
小学校	1.1%	2.3%	21.7%	74.9%	0.0%	100.0%
幼稚園	2.4%	4.8%	2.4%	88.1%	2.4%	100.0%
保育所	1.7%	0.0%	20.3%	76.3%	1.7%	100.0%
総計	1.4%	2.2%	18.5%	77.2%	0.7%	100.0%

【問5】：入学前後子どもたちに接する上で1番大切にしていること

	子どもの思いを丁寧に聞いて受けとめる	子どもの生き立ちについて理解する	子どものよさを、友達から認められるようにする	決まりの大切さに気づかせ守ろうとさせる	無答	総計
小学校	66.3%	3.4%	23.4%	6.9%	0.0%	100.0%
幼稚園	59.5%	0.0%	38.1%	2.4%	0.0%	100.0%
保育所	50.8%	1.7%	32.2%	13.6%	1.7%	100.0%
総計	62.0%	2.5%	27.5%	7.6%	0.4%	100.0%

【問6】：保護者が子どもに働きかけてほしいこと

	好き嫌いをなくし、食の楽しさを体験させる	読み聞かせ、子どもの遊びにかかわったりする	地域行事などで様々な経験をさせる	子どもの思いをしっかりと聞く	生活リズムを整えておく	総計
小学校	6.9%	8.6%	0.6%	28.6%	55.4%	100.0%
幼稚園	2.4%	9.5%	0.0%	38.1%	50.0%	100.0%
保育所	0.0%	5.1%	0.0%	42.4%	52.5%	100.0%
総計	4.7%	8.0%	0.4%	33.0%	54.0%	100.0%

【問7】：連絡会議の必要性

	必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だとは思わない	総計
小学校	61.7%	36.0%	2.3%	0.0%	100.0%
幼稚園	85.7%	14.3%	0.0%	0.0%	100.0%
保育所	62.7%	35.6%	1.7%	0.0%	100.0%
総計	65.6%	32.6%	1.8%	0.0%	100.0%

【問8】：連絡会議で重視していること

	子どもたちの実態について共通理解する	保護者に対する働きかけを共通理解する	重点に置いて取り組んでいることを理解する	育てたい力について共通理解する	総計
小学校	48.5%	5.3%	5.3%	40.9%	100.0%
幼稚園	26.2%	0.0%	19.0%	54.8%	100.0%
保育所	31.0%	1.7%	10.3%	56.9%	100.0%
総計	41.3%	3.7%	8.5%	46.5%	100.0%

【問9】：交流の必要性

	必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だとは思わない	総計
小学校	29.1%	48.6%	17.1%	5.1%	100.0%
幼稚園	47.6%	52.4%	0.0%	0.0%	100.0%
保育所	39.0%	42.4%	15.3%	3.4%	100.0%
総計	34.1%	47.8%	14.1%	4.0%	100.0%

【問10】：交流の目的

	幼児が学校の環境になれる	子どもの様子や相互の取組について理解する	保護者や地域に、保・幼・小の連携を示す	児童が年長への思いやりをもつ	総計
小学校	26.5%	41.2%	2.9%	29.4%	100.0%
幼稚園	19.5%	73.2%	0.0%	7.3%	100.0%
保育所	51.1%	34.0%	4.3%	10.6%	100.0%
総計	30.4%	45.5%	2.7%	21.4%	100.0%

【問11】：合同の保護者説明会

	必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だとは思わない	無答	総計
小学校	0.0%	17.7%	28.0%	45.7%	8.6%	100.0%
幼稚園	2.4%	19.0%	45.2%	23.8%	9.5%	100.0%
保育所	0.0%	27.1%	32.2%	33.9%	6.8%	100.0%
総計	0.4%	19.9%	31.5%	39.9%	8.3%	100.0%

【問12】：合同保護者説明会の良い点

	就学前の共通面が伝えられる	子どもの様子や相互の取組について理解する	保護者や地域に、保・幼・小の連携を示す	児童が年長への思いやりをもつ	総計
小学校	60.5%	12.3%	17.3%	9.9%	100.0%
幼稚園	44.4%	22.2%	11.1%	22.2%	100.0%
保育所	25.7%	37.1%	22.9%	14.3%	100.0%
総計	49.0%	20.3%	17.5%	13.3%	100.0%